

高齢期を生きる都市人と村人
— 「用意された役割」と「探し出す役割」 —

(学籍番号) 01SG3040

田久保 純

目次

まえがき	
序章 農村部と都市部では高齢期の人々の役割や活動に違いがあるのか	1 頁
第1章 文献からみる高齢期の役割や活動	2 頁
第1節 「高齢期の人々の役割や活動」とは何か	2 頁
第2節 「下位文化理論」との関連性	5 頁
第2章 対象と方法	7 頁
第1節 調査対象地の選定	7 頁
第2節 調査対象地の概要	7 頁
(1) 山形県朝日町	
(2) 東京都世田谷区	
第3節 調査内容と方法	11 頁
第3章 農村部における高齢期の人々の役割や活動の実態	15 頁
第1節 インタビュー対象者の属性	15 頁
第2節 役割や活動の実態とその特徴	16 頁
第4章 都市部における高齢期の人々の役割や活動の実態	22 頁
第1節 インタビュー対象者の属性	22 頁
第2節 役割や活動の実態とその特徴	22 頁
第3節 高齢期の人々の活動の場	33 頁
第5章 考察	39 頁
第1節 2つの地域における役割や活動の特徴の相違と社会的条件との関連	39 頁
終章 社会的条件によって変化する高齢期の人々の役割や活動	47 頁
第1節 本研究で得られた3つの知見	47 頁
第2節 本研究の限界と今後の展望	49 頁
あとがき	50 頁
注	51 頁
参考文献	52 頁
調査票	54 頁

まえがき

2003年夏、「人とのつながりの中で年を重ねること～社会学からのアプローチ～」というテーマで調査実習を行った。この実習は私が卒業論文執筆を決める大きな原動力となった。私達学生は「年を重ねる」ということがどのようなことなのか、人とのつながりの中でいかに年を重ねていくのか、ということを知るために多くの高齢者の方々にインタビューをさせていただいた。そして、高齢者と対話したことで、地域の中で様々な役割を持ち生き生きと生活している高齢者の存在に気がつくことができた。高齢者に関する機会がほとんど無い私達にとって、彼らの豊富な経験や考えに触れることができたということは貴重な体験となった。

私はインタビューを行ってみて気になった点がひとつあった。それは高齢者が持っている長年の生活の過程で積み重ねられてきた知識や経験が尊重されるとは限らない時代になってきたということである。次のような高齢者の語りからそのことはうかがえる。

「縫い物をしたって服を縫ったって子どもたちは着ない。冬に編み物を習って一生懸命編んだって誰も着ないもの！…寝巻きだって何だって昔は全部縫ったのに今は買ってるから」

(70代前半・女性)

「あれ食べないこれ食べないなんて言うから、孫たちなんかよ…ひとりになって生活したらどうなるのかって思うの…ああだこうだ言って憎まれて嫌な感じ与えられても嫌だと思ってるからあんまり言わないで」「友だち同士でなんかいろいろ話してるみたいね。私の言うことなんかより友だち同士の方が聞くじゃない、あれ」(70代後半・女性)

(柘植実習、「人とのつながりの中で年を重ねること～社会学からのアプローチ」、『社会調査実習報告書』、vol.20、p271、2004.)

私は高齢者と対話するまで、「積み重ねられてきた知識や経験を次世代に伝えること」は、高齢期にある人々の重要な役割であるという固定観念があった。しかし、高齢期の人々の役割や活動は、その人が生活してきた時代、地域の産業構造、文化など社会的な条件、そして様々な人間関係によって、変化したり異なったりするものではないかと考えるようになった。そこで、高齢期の人々の役割や活動はどのようなものがあるのか、実態を明らかにしてみようと思った。また、調査実習は農村部（山形県朝日町）で行われたので、都市

部の高齢期の役割や活動は異なるのだろうかという疑問も同時に抱いた。高齢期の人々の役割や活動を調査・比較することで、社会的条件と高齢期の役割や活動にある種の関連が見出せるのではないだろうかと考え、「高齢期の人々の役割や活動」に関するテーマを選んだのである。

序章 農村部と都市部では高齢期の人々の役割や活動に違いがあるのか

我が国における「高齢化」⁽¹⁾と「平均寿命の延び」⁽²⁾という社会現象は高齢期の人々の生活に大きな変化を与えた。人生50年から人生80年というように高齢期が長期化し、その時間をいかに過ごすかという問題に直面する人々が増えたのである。かつては「短い余生を送る時間」というイメージが強かった高齢期であるが、長期化した今、高齢期の人々がいかにして生き生きと過ごすのか、ということが大きな課題となってくる。生き生きと過ごすためには社会の中でなんらかの役割や活動を最後まで持ち続けることが必要であろう。長期化した高齢期を人はどのような役割を持ち、どのような活動をしているのだろうか。また、地域によって高齢期の人々の役割や活動に違いがあるのだろうか。高齢社会の中で生きている私達は高齢期の人々の役割や活動を知っておく必要があるのではないだろうか。

そこで、本研究では高齢期の人々の役割や活動はどのようなものがあるのか、農村部（山形県朝日町）と都市部（東京都世田谷区）の高齢者への聞き取り調査をもとに明らかにしたい。そして、2つの地域を比較することで、社会的条件と高齢期の人々の役割や活動との関連性を見出すことが本研究の課題である。

「高齢期」という言葉は研究を進める上で基本となる概念である。そこで、「高齢期」の考え方について説明をしておきたい。一般的に「高齢期」とは何であるか、という明確な定義は存在しない。なぜならば、その開始時期は人によって、社会によって価値観が異なるものだからである。例えば、ある人は定年退職後のことを「高齢期」とするかもしれない。あるいは孫の誕生後を「高齢期」とすることもあろう。このように、「高齢期」を一つの概念でまとめあげることは困難なのかもしれない。しかし、本研究では農村部と都市部の高齢期の役割や活動の実態を明らかにするために聞き取り調査を行い、比較分析を進める上では「高齢期」を定義づけることが必要になってくる。そこで、本研究では「高齢期」の開始時期を65歳以上と定めたい。実際に国勢調査では65歳以上を老年人口としている。また、WHO（World Health Organization：世界保健機構）のような国際機関で用いる基準も65歳以上を老年人口としている。つまり、高齢者の定義は65歳以上とすることが通例であると考えられる。「高齢者」は「高齢期にある人」とも言い換えることができる。このようなことから「高齢期」の開始時期を65歳以上とする。

第1章 文献からみる高齢期の役割や活動

第1節 「高齢期の人々の役割や活動」とは何か

ここでは「高齢期の人々の役割や活動」に関する先行研究でどのように述べられているのかを紹介するとともに、私が今回研究する意義を見出したい。

(1) 「静かに穏やかに過ごす高齢者」から「活動的な高齢者」へ

会田敬志（1996）は農村高齢者の役割と活動の実態について配表調査をもとに明らかにしている。ここで調査対象となった農村は親族と同居する高齢者割合が高い「山形県朝日町」と高齢者の単独世帯割合が高い「兵庫県朝来町」であった。高齢者率はともに22%であり、高齢化が進んでいる地域を選定していた。会田によれば、両地域とも高齢者の活動や役割に関して性と年齢による規定が強いという結果を報告している。また、朝来町は生産や福祉の分野でより組織活動が活発で朝日町は文化・学習活動が活発であると分析している。

森岡清志（1994）は大都市居住の高齢者に注目し、旧来の高齢者像から新しい高齢者像の変容過程についてまとめている。森岡によれば、日本社会における高齢者像が「子や孫に囲まれて静かに穏やかに余生を過ごす高齢者」から「いつまでも現役で、活動的な高齢者」へと変化していると述べている。この変化の背景には「家規範の弱化」「隠居慣行の減少」「年齢規範の揺らぎ」「平均寿命の伸び」が大きく関係しているという。このような社会状況の変化に伴い、現在の高齢者は様々な役割を持ち、活動をする人が多くなっているということを述べている。

会田と森岡の研究からは現在の高齢者は様々な役割を持ち、活動をする人が多いということがみえてきた。しかし、私達が思い描く高齢者の姿は「子や孫に囲まれて静かに穏やかに余生を過ごす」というイメージが強いのではないだろうか。そこで、本研究において高齢期の人々の役割や行動の実態を把握することは私たちが持つ固定概念を取除き、新たな高齢者像が見出せると思われる。また、会田の調査は農村の高齢者を対象としたものであったため、都市部の高齢者の役割や活動はどうか、という疑問が生じた。都市部においても調査し、2つの地域を比較することで、社会的条件と高齢期の人々の役割や活動にある種の関連が見出せるのではないかと考えた。

(2) 積み重ねられてきた知識や経験が尊重されるとは限らない時代

ここで紹介する2つの研究は「経験や知識が尊敬されている高齢像」を描き出しているところが共通している

野口実（2000）は前近代の高齢者の社会的位相についてまとめている。野口によれば、「前近代の老人」は彼らの知恵を子供たちに伝授する共に、子供の社会化を行う役割を持っていたという。また、神祭りでは神の声を聞き取る霊力・能力を持つ存在として敬われ、共同体社会の世話役あるいは調整役を担っていたと述べている。長年にわたる人生経験のなかで蓄えられてきた老人の知恵が共同社会のなかで有効活用された時代があったということがわかる。前近代では高齢者が有する知識や経験が尊重され、高齢者の存在意義が大きい世の中であったことがうかがえる。

青柳まちこ（2004）は「高齢者の地位と役割」を人類学的視点によって明らかにしている。青柳によれば、高齢者は財産の所有権で優位に立ち、日常生活に関する仕事に対して一切の責任と運営権を持つ存在であると述べている。また、高齢者は過去の経験に基づく知識を若者に伝達する役割、神話や伝承の語り部としての役割をもっているとしている。

このように、野口と青柳は「過去の経験に基づく知識を伝達する役割」が高齢者にはあるとしている。しかし、「まえがき」で述べたように高齢者が持っている長年の生活の過程で積み重ねられてきた知識や経験が尊重されるとは限らない時代になっている今、「過去の経験に基づく知識を伝達する役割」以外のものを今回の研究で明らかにすることは意義があるのではないだろうか。高齢者像は普遍的なものではなく、森岡（1994）が高齢者像は変容すると述べているように時代の流れやその時の状況によってそれは変化し続けるものであると思われる。

(3) 高齢期の役割喪失

袖井孝子（1987）は老年期の役割喪失は大きなストレス源（アイデンティティの危機）であると述べている。特に「定年退職」が男性にとって、「母親業の終了」が女性にとってストレス源となり、既存のシステムの均衡を失わせているという。また、袖井は現代の高齢期の生活スタイルの価値観について次のようにいう。「一定年齢に達したら次の世代に権限を譲り、引退生活に入るといった隠居制度のあった時代と違って現代では、いつまでも若々しく現役であることに価値を置かれる。職業人としてあるいは家庭人としての現役を放棄することに抵抗感のある現代では、中年期から老年期の移行期にアイデンティティの危機

に直面し、危機を逃れるために現役であり続けようとする。」(袖井、1987 ; 76)

このように、袖井は高齢期に役割を喪失することを「危機」と表現している。高齢期に役割を喪失し、危機状態に陥ってしまう人は多いのだろうか。やはり、高齢期は否定的なイメージなのだろうか。山形県朝日町でのインタビューでは高齢期の役割の喪失感について話をされた方はいなかった。むしろ、母親業や今までの辛い仕事から解放され、自分の好きなことができる時間を持つことができるようになって幸せであると語った人の方が多い。そもそも、現役で農業をしている方が多い農村部では「定年退職」という概念はぴんと来ない。「定年退職」はサラリーマンが多い都市部で生活する人にとってはアイデンティティの危機を導くストレスなのではないだろうか。社会的条件が違うことは高齢期の役割や活動に影響を与えるのかもしれない。

(4) 高齢者のパーソナルネットワーク

1967年に行われた研究において「米国の高齢者のパーソナルネットワークの中で親族よりも友人との交際の方が高齢者の幸福感に大きな影響を持つ」という結果がでている。この研究結果に対して森岡清志(2004)は日本の高齢者も同じことが言えるのだろうか、日本の高齢者の幸福感に影響をもつのはどのようなパーソナルネットワークなのか、という問いの設定している。そこで、森岡は「P.G.C. モラル尺度⁽³⁾」を用いて台東区と目黒区に住む60歳から75歳の男女の幸福感を測定し、大都市の高齢者の幸福感を規定する要因をまとめている。

森岡は大都市の高齢者の幸福感を規定する要因として男性は「友人ネットワーク」、女性は「親族ネットワーク」、男女共に「健康状態」の3つをあげている。そして、森岡は大都市における高齢者のパーソナルネットワークの特徴として勤労者であった者は定年により職縁ネットワークは再編、縮小を余儀なくされると述べている。「定年退職」は老後の生活に大きな影響を与えるようだ。

この研究報告からパーソナルネットワークが高齢者の幸福感を規定するということが見えてきた。もしかしたら、幸福感だけではなく、高齢期の生活(役割や行動)も規定されるのかもしれない。都市部と農村部の高齢者のパーソナルネットワークに特徴的な違いを見出すことが可能であれば、その違いに伴って高齢期の生活(役割や行動)の実態も見えてくるのではないだろうか。本研究では高齢者のパーソナルネットワークにも注目していきたい。

これまで6つの先行研究を紹介し、本研究のテーマに関連させながら意見を述べてきた。先行研究を整理していくと、高齢期の人々の役割や活動は、その人が生活してきた時代、地域の産業構造、文化など社会的な条件、そして様々な人間関係によって異なるのではないだろうかという仮説がたつ。例えば、森岡の研究から高齢者の活動はパーソナルネットワークが大いに関連しているということが読み取れた。そこで、農村部と都市部に住む人々の高齢期の人々の役割や活動を単に比較するだけではなく、人々を取り巻く社会的条件がその人々の役割や活動にどのように結びついているのかということをも本研究で考えることが重要である。

第2節 下位文化理論との関連性

前述したように高齢期の人々の役割や活動は、その人が生活してきた時代、地域の産業構造、文化、人間関係などの社会的条件が大きく影響するのではないかと考えられた。この仮説に対する答えを見出すためのヒントを与えてくれたのが「下位文化理論」であった。そこで、この理論について簡単に紹介しておきたい。

「下位文化理論」とは都市社会学者であるC.S.フィッシャー（1984）が都市の生活を説明するために導きだした理論である。フィッシャーによれば、都市度が高いと接触する人口量が増え、ネットワークの選択性を増大させ、その結果、同じ関心があるもの同士が同類結合し、多様な「下位文化」が形成されていくという。ここでいう「下位文化」とは特定の特徴を共有した人々が集まってできた文化である。より特徴的な価値や習慣を共有したライフスタイルということである。フィッシャーは「下位文化」を次のような例をあげて説明している。「千人に一人がモダン・ダンスに強い関心を持っているとしよう。人口五千人の小さな町では、平均して五人、そういう人がいることを意味するが、これはせいぜいダンスについて話をするのが精一杯の数である。しかし、百万の都市では、1千人になる。」（フィッシャー、1984；57）つまり、都市の規模が大きければ大きいほど、モダン・ダンスに関心がある人と接触する機会が多くなり、一緒に語り合ったり、実際に踊って楽しんだりすることが可能な環境が形成されるというわけである。

このような「下位文化理論」を実際に調査する都市部にあてはめて考えることができるのだろうか。東京都世田谷区にも「下位文化」が存在するのであれば、都市部に住む高齢期

の人々の役割や活動をについて説明することを容易にさせてくれるのかもしれない。そこで、本研究では「下位文化理論」に留意しながら、都市部の高齢期の人々の姿を見出し、農村部との比較ができればよい。

第2章 対象と方法

第1節 対象地の選定について

高齢期の人々の役割と実態を把握するために、農村部の代表として「山形県朝日町」を、そして都市部の代表として「東京都世田谷区」の2つの地区を選定した。

山形県朝日町は2003年度社会調査実習（柘植ゼミ）において聞き取り調査の対象となった地域であり、私自身も実習生の一人として調査実習に参加した。本研究では朝日町における調査結果に関しては2003年度社会調査実習報告をもとに分析を進めることをあらかじめ断っておく。

朝日町は、老年人口の割合が高く、かつ親族と同居する高齢者割合も高いタイプの代表的な農村地域である。農村部と都市部の高齢期の役割と活動の対比を描くにあたり、都市部の対象地も老年人口の割合が高い地域を対象地とすることが望ましいと考えた。しかし、現実的には老年人口の割合が高い都市部のある地域のなかから聞き取り調査の協力者を探すことは困難であった。そこで、本研究では「S研究会」⁽⁴⁾のメンバーに協力を得られることになったので、都市部の対象地を東京都世田谷区とした。

第2節 調査対象地の概要

(1) 山形県朝日町

1) 統計データからみた朝日町

朝日町は山形県のほぼ中央に位置し、総面積は196.3平方キロメートルを有する。周囲は国立公園朝日連峰に囲まれ、町を二分するように北東部から南西部へと最上川が流れている。また、山林と原野が土地面積の73%を占めており、自然豊かな町である。気候は夏季と冬季の寒暖の差が激しく、冬は雪が多い。このような自然条件が果樹栽培に適しており、特にリンゴは主要産物である。朝日町のキャッチフレーズは「りんごとワインの里」であり、「無袋ふじ」や「朝日町ワイン」は全国的に有名である。

国勢調査報告によると、1995年（平成7年）の総人口が9,819人であったのに対し、2000年（平成12年）では9,337人であり、前回からは482人減少（増減率-4.9%）している。また、1995年（平成7年）の世帯数は2,450世帯であったのに対し、2000年（平成12年）では2,415世帯であり、前回からは35世帯減少（増減率-1.4%）している。このように、人口と世帯数は減少傾向にある。一方で65歳以上の人口と65歳以上のいる一般世帯は増

加傾向にある。1995年（平成7年）の65歳以上の人口が2,652人であったのに対し、2000年（平成12年）では2,880人となっている。また、65歳以上のいる一般世帯数も1995年（平成7年）では1,660世帯であったのに対し、2000年（平成12年）では1,751世帯となっており、増加している。これに伴い、老年人口割合も1995年（平成7年）では27.0%であったのが、2000年では30.8%であり、拡大している。一般的に総人口に占める65歳以上の割合が7%以上で高齢化社会、14%以上で高齢社会といわれているが、全国平均は17.3%であり、朝日町の老年人口割合は非常に高い値であるということがわかる。このようなことから町では高齢社会に対応していくために「老人福祉計画」「老人介護計画」に基づいて様々な福祉サービス事業が展開されている。

2000年（平成12年）の産業別就業人口構成比は第一次産業人口が28.9%、第二次産業人口が35.0%、第三次産業人口が36.1%である。全国平均がそれぞれ5.0%、29.5%、64.3%であるということから、朝日町は第一次産業の割合が高く、第三次産業の割合が低い。朝日町における第一次産業では「農業」が最も多く、山形県内においても「農業」が盛んな地域である。

2) 地区の概況

山形県朝日町は2003年度社会調査実習（柘植ゼミ）において聞き取り調査の対象地区としたのは元町区、常盤区、大谷連合区、和合区、立木区、大沼区、八ツ沼区の7集落である。それぞれの地区の概況について調査実習生は次のように報告している。

元町区は町の中心部といえる地区であり、役場をはじめとする公共機関や商店街が立ち並び、商業が中心となっている。

常盤区は町の南西部に位置しており、りんごや西洋梨などの広大な果樹園に囲まれた地域である。主な産業は農業（果実栽培）であるが、農作物だけの収入で生活することは難しく、大部分は兼業農家である。

大谷連合区は町の北部に位置し、中心からやや離れている。集落は7区に区割りされており、それぞれの区ごとに組織が存在する。この地区の主な産業は水田と果実栽培であるが、大部分が兼業農家である。また、朝日町の最も大きなお祭り「風神祭」が行われる地区でもある。

和合区は町の北東部に位置している。果実栽培に適した地形や気候のため、農家の3分の1以上が専業農家であり、他の地域に比べて専業農家の割合が高い地域である。

立木区は町の西部の山あい位置し、農業には不適切な地域であるため大規模な農業は行われていない。また、他の地区に比べて世帯数が少なく、住民の多くは高齢者である。町の中でも高齢化が進んだ地区であるといえる。

大沼区は町の北西部に位置し、国の名勝に指定されている「大沼の浮島」が大変有名である。この地区においても果実栽培、とりわけりんご栽培が盛んに行われている。

八ツ沼区は町の西部に位置し、楯山を中心に集落が形成されている。農家は2軒のみで大部分の住民が会社員や公務員として働き、生計を立てている地区である。

それぞれの地区ごとに特徴があるが、共通していることはりんご栽培が盛んにおこなわれているということだろう。

(2) 東京都世田谷区

1) 統計データからみた世田谷区

世田谷区は東京都23区の西南に位置し、総面積は58.08平方キロメートルを有する。関東大震災後、急速に宅地化が進み、人口が急増した地域である。現在、世田谷区の人口は東京23区内の中で第1位である。人口の規模では鳥取県および島根県のそれより大きい。人口が多い要因の一つには交通の便が非常に良いということがあげられる。小田急線、京王線、井の頭線、田園都市線、東横線、目黒線というように都心に向かう路線が6つも走っており、電車を利用すると新都心新宿までは約15分という便利さである。また、路線バス網が密であると共に中央高速道路、東名高速道路に続く2つの首都高速道路も区内を横切っている。このように、世田谷区は交通システムが発達した地域といえる。都心へのアクセスが便利でありながらも世田谷公園や羽根木公園など自然が多く残る区でもある。

国勢調査報告によると、1995年（平成7年）の総人口が781,104人であったのに対し、2000年（平成12年）では814,901人であり、前回からは33,794人増加している。（増減率4.3%）また、1995年（平成7年）の世帯数は364,436世帯であったのに対し、2000年（平成12年）では388,879世帯であり、前回からは24,443世帯増加している。（増減率6.7%）このように、人口と世帯数は増加傾向にある。そして、65歳以上の人口と65歳以上のいる一般世帯も増加傾向にある。1995年（平成7年）の65歳以上の人口が104,398人であったのに対し、2000年（平成12年）では120,800人となっている。また、65歳以上のいる一般世帯数も1995年（平成7年）では76,409世帯であったのに対し、2000年（平成12年）では93,653世帯となっており、増加している。老年人口割合は1995年（平成7

年)では13.4%であったのが、2000年では15.7%であり、全国平均を下回るものの高齢化が進行している地域であることは確かである。

産業別就業人口構成比は第一次産業人口が0.4%、第二次産業人口が16.5%、第三次産業人口が80.0%である。全国平均に比べ、第一次産業と第二次産業の割合が低く、第三次産業人口の割合が非常に高い地域である。

2) 地域の概況

第2次世界大戦争直後から高度成長期にかけて首都圏への人口が集中していった。その結果、農村地区から世田谷区に人口が流入し、都内有数の住宅地区となった。世田谷区は現在、世田谷地域、北沢地域、玉川地域、砧地域、烏山地域の5地域から構成されている。

本調査で対象地区としたのは5地域のうちの世田谷地域、北沢地域、砧地域、烏山の地域である。

世田谷区の東部に位置する世田谷地域、北東部に位置する北沢地域は都心部から世田谷区への玄関口となっている。また、人口集中に伴って商店街が著しく発展していった地域でもある。商店街の代表的な存在として次の2つがあげられる。個性的なファッションを求めて世田谷区外からも多くの人が集まってくる下北沢。公共施設と商業施設、そしてオフィスフロアから成る、にんじん色の高層ビル「キャロットタワー」がある三軒茶屋である。どちらも多くの人で賑わう場所だ。1480年世田谷城主吉良政忠が創建した後、井伊家の菩提寺でもある「豪徳寺」も世田谷地域では有名である。

砧地域は世田谷区の東部に位置しており、成城など閑静な住宅街が集まる地域である。

烏山地域は北西に位置している。関東大震災の被害を受けた浅草などの地域から寺が移転してきたことにより、寺が多く集まる地域といえる。

この節では山形県朝日町と東京都世田谷区の概要を述べてきた。2つの地域の特性をまとめると次のようなことである。

山形県朝日町は老年人口割合が全国平均より上回る地域であり、そこに住む人々は農業を基盤として生活している人が多い。これに対して東京都世田谷区は人口が非常に多く、サラリーマン家族が多く住む地域である。また、交通システムが整えられていることにより、都心への移動が非常に便利な地域でもある。

第3節 調査内容と方法

(1) 山形県朝日町の場合

前述したように本研究では山形県朝日町の高齢者の役割と活動の実態は 2003 年度社会調査実習（柘植ゼミ）において実施された聞き取り調査をもとに分析を進めた。ここでは朝日町で実施された調査内容と方法について説明しておく。

朝日町での調査は「人とのつながりの中で年を重ねること～社会学からのアプローチ～」というテーマで 2003 年 8 月 29 日から 9 月 2 日までの 5 日間、聞き取り調査と参与観察を中心にフィールドワークが実施された。(実習者は学部学生 13 名、大学院生 2 名)⁽⁵⁾ 調査票に基づいて「人とのつながりの中で年を重ねること」についてスノーボール方式で朝日町の住民への聞き取り調査が行われた。聞き取り調査の対象者は 60 歳以上 48 名(男 22 名、女 26 名)と 40 歳以下 9 人(男 3 人、女 6 人)のあわせて 57 名であった。また、福祉や生涯教育などに関連した公共機関の担当者、町内の各区長、祭りやお茶会などの主催者の方々へのヒアリングも同時に行われた。

聞き取り調査は以下に示す 16 の質問項目について行った。

- ①基本的属性に関する質問（年齢、職業、同居と別居家族について）
- ②普段の生活について（仕事、役割、趣味、楽しみ）
- ③普段の生活で大変だと思うことについて（その内容、大変だと思うあるいは思わない理由）
- ④普段の生活で楽しみにしていることについて（その内容、誰と一緒に）
- ⑤生まれた場所、住んだことのある場所の概略、朝日町に住んで何年か、朝日町に住む理由
- ⑥地域の集まりの参加度（どのような集まりか、参加者について、祭り・人足・葬式などの参加について、参加しない場合家族の誰かが参加するのか、参加するあるいは参加しない理由）
- ⑦身に何かあったときどのようにするか(誰に連絡するか、嬉しいときは誰に連絡するか、連絡した人との関係)
- ⑧年をとったと感じたことはあるか(具体的にどのようなことか、どう感じたか、どのような時が年をとったと感じるか)
- ⑨年をとることに対して「良いこと」と「悪いこと」について（その理由）

- ⑩大人像について（想像している大人像にあてはまるか、年をとることと年齢との関係について）
- ⑪理想の老後について（理想通りになりそうかどうか、介護が必要なとき誰に介護してもらいたいのか、老後への不安の有無とその内容、その不安の解消法）
- ⑫人生経験について（思い出に残る出会い、人生の中で辛かった体験、自分に変化を与えた体験）
- ⑬過去について（子供の頃になりたかったもの、学校卒業後なりたかったもの、若い頃のやりがい）
- ⑭現在について（現在のやりがい、やりがいの変化）
- ⑮未来について（これからやりたいこと）
- ⑯人生観について（好きな年代に行くことができるのならばどの年代を選ぶか、経験したことで若い人に伝えたいこと、現在の自分から過去の自分をどう思うか）

なお、質問の順序やプロセスについては質問者個々によって異なる。私は男性2名と女性1名のあわせて3名の聞き取り調査を担当した。また、グループで区長、保健課の担当者、特別養護老人ホーム施設長のヒアリングを担当した。

(2) 東京都世田谷区の場合

本調査に先立ち、地域概況を把握するために2004年7月に予備調査を実施した。本調査は参与観察と聞き取り調査の2つの調査を実施した。

1) 参与観察

参与観察は都市部に住む高齢期の人々がどのような活動をしているのか、実際に活動の場に参加することでその実態を知ることが目的として行った。参与観察は2つの場で実施した。ひとつは「S研究会」で、実施時期は2004年7月21日、9月17日のあわせて2回である。ともに世田谷区宮坂区民センターにて開催された。もうひとつは「世田谷区老人大学」⁽⁶⁾の「学園祭」で、実施時期は2004年10月19日、20日の2回である。学園祭は世田谷区老人会館にて開催された。

2) 聞き取り調査

聞き取り調査では都市部に住む高齢期の人々が地域社会の中で担っている役割や行っている活動の実態を明らかにすることを目的として行った。したがって、対象者の選定にあ

たっては社会的活動が活発な世田谷区内に住む 65 歳以上の男女を推薦していただき、ご協力を得られた方に対して聞き取り調査を実施した。対象者は男性 4 名、女性 4 名のあわせて 8 名である。実施時期は 8 月から 10 月にかけてである。

聞き取り調査の質問項目については山形県朝日町での聞き取り調査に用いた質問項目をもとに高齢期の人々の役割や活動を見出すことができるように追加・修正した 16 の質問項目を用いた。その内容は以下の通りである。

- ①基本的属性に関する質問（年齢、職業、同居と別居家族について、子供や兄弟と会う機会はあるのか、その頻度）
- ②普段の生活について（時間の使い方、仕事・役割・趣味・楽しみに関連させて）
- ③普段の生活で楽しみにしていることについて（その内容、誰と一緒に）
- ④生まれた場所、世田谷区に住んで何年か
- ⑤地域の集まりの参加度（どのような集まりか、参加者について、祭り・葬式・地区の集会・サークル活動などの参加について、参加するあるいは参加しない理由）
- ⑥趣味や何らかの活動のために外出する頻度について
- ⑦外出時何を利用しているか
- ⑧好きなことをしたり外出したりするときに妨げになること
- ⑨年をとったと感じたことはあるか(具体的にどのようなことか、どう感じたか、どのような時が年をとったと感じるか)
- ⑩年をとることに対して「良いこと」と「悪いこと」について（その理由）
- ⑪人生経験について（思い出に残る出会い、自分に変化を与えた体験）
- ⑫過去について（若い頃のやりがい）
- ⑬現在について（現在のやりがい）
- ⑭未来について（これからやりたいこと）
- ⑮人生観について（経験したことで若い人に伝えたいこと）
- ⑯ネットワークに関する質問（気心が知れた人について、手助けしてくれる方について）

以上、16 項目に基づき聞き取り調査を行った。ただし、女性の対象者 4 名中 2 名は短時間(30 分程度)でのインタビューという要望があったので、質問項目は①～⑨、⑬、⑭の 11 項目に限定した。

第2章では調査対象地の概要と調査方法について述べてきた。調査対象地の概要をまとめたことにより、山形県朝日町と東京都世田谷区という2つの地域は人口や産業構造などの社会環境や自然環境が異なっているということが分かった。この違いは2つの地域の高齢期の人々の役割や活動に大きな影響を及ぼすのではないだろうか。この関連性を見出すためにも2つの地域を比較することが重要である。

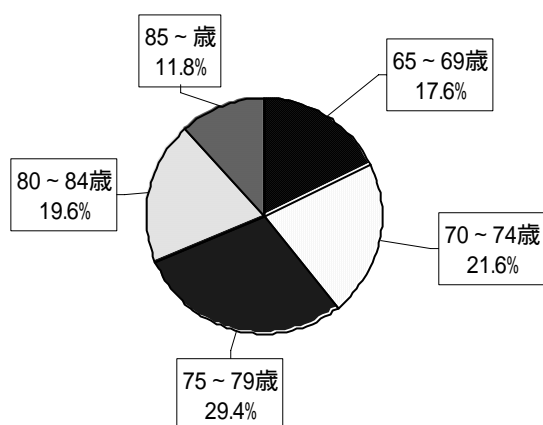
第3章 農村部における高齢期の人々の役割や活動の実態

本章では農村部の代表として選定した山形県朝日町における聞き取り調査の結果をもとに高齢期の人々の役割と活動の実態について明らかにしたい。具体的には第1節でインタビュー対象者の属性、第2節で役割や活動の実態とその特徴について事例を挙げながら述べていく。

第1節 インタビュー対象者の属性

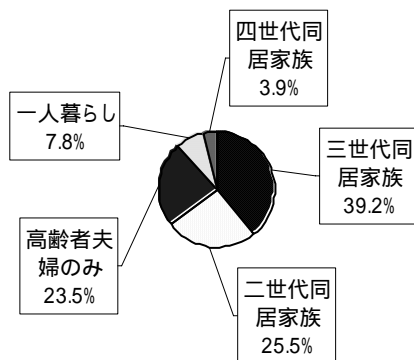
山形県朝日町における聞き取り調査では60歳以上48名(男22名、女26名)と40歳以下9人(男3人、女6人)のあわせて57名の協力が得られた。ここでは、本研究の主旨が高齢期の人々の役割と活動の実態であることから、分析の対象者を65歳以上の男女に焦点をあてた。

図1 分析対象者の年齢別構成



今回、分析の対象となったのは65歳以上の男女51名である。性別にみると、男性が22名(43.1%)、女性が29名(56.9%)である。年齢階層別にみると、65~69歳が9名(17.6%)、70~74歳が11名(21.6%)、75~79歳が15名(29.4%)、80~84歳が10名(19.6%)、85歳以上が6名(11.8%)である。分析対象者の年齢階級別内訳を図1に示した。

図2 分析対象者の家族形態



家族形態についてしてみると、「三世代同居家族」が最も多く39.2%であり、親族と同居する高齢者割合が高いタイプの代表的な農村地域といえる。次いで、「二世代同居家族」が25.5%、「高齢者夫婦のみ」が23.5%、「一人暮らし」は7.8%であった。ちなみに一人暮らしをしている方は全て

女性であった。また、割合では非常に低いですが、子供・孫・ひ孫と同居している「四世代同居家族」が全体の3.9%を占めていた。分析対象者の家族形態を図2に示した。

現在の職業については「農業」と回答された方が20名(39.9%)と最も多く、88歳になられた今でも現役で農作業をしているという人もいた。次いで、「無職」が18名(35.4%)という結果であった。その中でも以前は農業をしていたが、今は子供に仕事を任せて畑仕事を手伝うと回答された方が多く、農業とのつながりは非常に強い。また、女性に限定されたものとして「専業主婦」という回答をした人が6名(11.8%)であった。

第2節 役割や活動の実態とその特徴

高齢期の人々の役割や活動の実態を明らかにするために私は次のようなプロセスを踏んだ。はじめに実習者全員によってテープおこしをされたインタビュー内容を基にして、役割や活動に関連した内容と判断したものを全て抜き出し、データとした。これらのデータをカテゴリー化すると、「フォーマルな役割」「インフォーマルな役割」「加入している団体」「参加している活動」「趣味」というように大別することができた。また、高齢期に担っている役割や活動を行っていく上でのネットワークを把握するためにも、それに関連したデータも集めた。具体的には「地域の集まりの参加度とその理由」「地域の人々との関わり合い」などに分けることができた。

では、山形県朝日町における高齢期の人々の役割や活動についてインタビュー内容を基に抽出したものをカテゴリー別に挙げてみよう。

「フォーマルな役割」は「集落の役員」「婦人会や女性部の役員」「長寿クラブの役員」などが目立っていた。また、朝日町には「隣組」という組織があり、これを通しての掃除や葬式の手伝いなどといった、地域で決まっている役割が存在している。また、少数であるが、「観光案内」や「子供にグラウンドゴルフを教える」といったようなボランティア的な役割もあった。

「インフォーマルな役割」は「家事」「自家菜園づくり」「畑仕事の手伝い」「草取り」「犬のえさやり」「孫の世話」が目立った。家事については性差が存在し、担当しているのは女性が多かった。男性で家事を担っていると回答した人は少数で「布団の上げ下ろし」や「お風呂洗い」など部分的に担当しているということであった。

「加入している団体」は高齢者福祉の一環として朝日町が主催している「長寿クラブ」や「高齢者大学」などに加入している人が目立った。「長寿クラブ」とはグラウンドゴルフ、ダ

ンス、カラオケなどのレクリエーションや健康に関する勉強会、そしてお茶会など、余暇を楽しむ場である。朝日町に住む65歳以上であれば、誰でも加入できる。「高齢者大学」は講演などを通して教養を深めたり、体を動かしたりすることを目的とした場である。加入条件は「長寿クラブ」と同様である。

「参加している活動」は前述した「長寿クラブ」で行われる「グラウンドホッケー」「踊り」「旅行」「お茶会」「生け花」「カラオケ」などが目立った。また、「高齢者大学」に通い毎月講義を聴くという回答もあった。

「趣味」についても「長寿クラブ」で参加している活動を挙げた人が目立った。その他に「近隣の人とお茶のみ」「畑いじり」「裁縫」「植木の手入れ」「読書」「旅行」「美術品収集」「記録づくり」など多彩な回答が得られた。「趣味」については「やりがい」や「楽しさ」と回答する人が大部分であった。

ここで重要なのは対象者51名中、26名(50.9%)が現役でなんらかの職業についているということである。特に農業に携わる人は20名(39.9%)もいる。朝日町の高齢期の人々の活動は「職業」と切り離すことができないようである。

役割や活動の種類をカテゴリー別に表1にまとめた。

表1 役割や活動の種類

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	集落の役員、婦人会・女性部の役員、長寿クラブの役員、隣組における役割
インフォーマルな役割	家事、自家菜園づくり、畑仕事の手伝い、草取り、犬の餌やり、孫の世話
加入している団体	長寿クラブ、高齢者大学、婦人会、隣組
参加している活動	長寿クラブで行われる様々なクラブ活動(グラウンドホッケー、踊り、カラオケ) 高齢者大学での聴講
趣味	長寿クラブや高齢者大学での活動そのもの 近隣の人とお茶のみ、畑いじり、裁縫、植木の手入れ、読書など

カテゴリー化していく作業を進めるにつれて朝日町の高齢期の人々の役割や活動はある特徴が見えてきた。それは年齢と性別によって彼らの役割や活動の大部分は固定化されているということである。その特徴を表2に示した。

表2 4つの類型別の高齢期の役割・活動の特徴

	I	II	III	IV
中心層	男性	60歳代女性	70歳代女性	80歳代男女
具体的内容	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>農業従事者多い</u> ・<u>地域の役員</u>などフォーマルな役割に従事していることが多く、<u>地域の集まりの参加度は高い</u> ・町を明るくしたいなどといった地域に貢献したいという意識が強い 	<ul style="list-style-type: none"> ・奉仕活動に従事しながら地域交流あるいは世代交流を深めている。 ・<u>家事全般</u>を引き受けながら<u>婦人会</u>などの団体に所属し、文化活動を楽しむ ・<u>人足、お葬式の手伝い</u>は必ずする 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>お葬式の手伝い</u>には必ず参加 ・<u>長寿クラブ</u>や<u>高齢者大学</u>に所属している人が目立つ。 ・<u>近隣の人々とのお茶のみを楽しむ</u> ・<u>家事</u>とは重なるところも多くあるので点線で区切った 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割や活動を妨げているものとして身体的機能の低下が大きく関係する ・好きなことを自分のペースで行っている

男性の場合は年齢差というよりも性差が著しく現れていた。農業に従事している人が多い。また、地域の役員などフォーマルな役割に従事し、地域の集まりの参加度は高いという特徴がみられた。集まりによく参加する理由は町を明るくするためなど、地域に貢献したいという意識が強い傾向にあった。例えば、ある男性は地域の集まりに参加する理由を次のように語っている。

「参加する理由ねえ。やっぱり町を明るくするとか、参加することによって地域の方との交流ってことだね。」(60歳代後半男性)

このように朝日町の男性は地域の集まりに参加し、町づくりを積極的に行おうとする姿が特徴的であった。しかし、80歳代になると身体的機能の低下により参加できなくなってくるという回答がしばしば見られた。役割や活動を妨げるものとして身体的機能の低下が大きく関係するようだ。また、活動も盛んであり、長寿クラブや高齢者大学に所属する人が大部分であった。ただし、60歳代男性は個々に趣味を楽しむといった印象を受けた。

このような男性に対して女性の場合は性別だけではなく、年齢差による特徴が明らかで

あった。

60 歳代女性は普段行っている活動について次のように語っている。

「昨日は西五百川小学校の 5 年生に、何人かの残って、昨日は(グラウンドゴルフの)練習だったけども 11 時から 12 時までには指導してって言われて一緒に楽しんできました。生徒と。」「孫と一緒にいたいすごく楽しかった。」(60 歳代後半女性)

「地域での役割は母子推薦委員をやっています。3 年目ですけどね。(中略)近所の 区の子供を、学校に入る前の子供だね、その子供 6 名くらいいるんだけど、健康状態とか役場で目が届かないところを一応見てくれと頼まれています。」(60 歳代後半女性)

「あの、ここ文化教室があるんです。朝日町で、婦人会で。(中略)選んだのは民謡、踊り、グラウンドゴルフ、それから書道、お華もやったんだけど、今は 3 つに絞っています。民謡と踊りとゴルフ。」(60 歳代後半女性)

60 歳代女性は小学生を対象に畑づくりやグラウンドゴルフについて指導や奉仕活動に従事しながら地域交流あるいは世代間交流を深めているという特徴があった。朝日町では 41 歳以上 70 歳未満の女性は「婦人会」という地域の組織に所属し、奉仕活動や文化活動(民謡や踊りなど)などを行うことが一般的なようである。このようなことから、この年齢層の女性たちは家事全般を引き受けながら婦人会に所属していることが多く、奉仕活動や文化活動を通して楽しんでいる様子が見受けられた。60 歳代の女性にとっては「婦人会」という組織が役割や活動に大きな影響を及ぼしていると思われる。また、地域の集まりにはよく参加すると回答する人が多く、特に「人足(にんそく)⁽⁷⁾」や「お葬式の手伝い」には必ず参加するということであった。

70 歳代女性は隣組を通してのお葬式の手伝いなどの役割があるといった回答が目立っていた。地域で必ず参加しなければならないものが存在しているということがわかる。60 歳代女性の特徴からも分かるように女性にとってお葬式の手伝いは重要な役割なのではないだろうか。お葬式の手伝いについてある女性は次のように語っている。

「お葬式は必ずいがんねんねえの。隣組で。私の組は 7 組で、10 人いんのよ。10 戸ってこと。8 組まであるんだけど、10 戸は多いほう。7 組は今年になってから 3 人亡くなったのよ、は。」(70 歳代後半女性)

「みんなでお手伝い。2人ずつ、男と女と。一人亡くなるでしょ、そこからほら各家からはみんな2人ずつ。親類の人は亡くなればすぐ手伝いだね。普通の手伝いの人はお葬式の日だけ、2人ずつね男と女の人。」「その家に集まってねそれで色々相談したり、手伝うことを。でも一日だけね手伝いは、でも親類の人が亡くなればすぐ手伝いだけだね。2日も3日もかかるわけよ。」(70歳代後半女性)

この事例から「隣組」という組織の存在に気が付く。『新社会学辞典』によると、「隣組」とは「1940年の内務省訓令に基づいて軍国主義体制に協力する民間末端機構として全国的に組織されたものをいう。この組織の基底には、向こう三軒両隣という自然発生的な地縁結合があり、それらを政治的・行政的に編成したものといえよう。(中略)第二次大戦後、占領軍指令で制度としての町内会隣保班は廃止されたが、実質的には存続し、1952年の指令解除後は町内会などの任意団体として機能することになった。」とある。朝日町には「隣組」という地域組織形態が現在でも残り、相互扶助と協力性の機能を果たしているのだと思われる。この「隣組」が朝日町に住む人々の役割や活動に大きな影響を与えているということが推測される。

この年齢層の女性たちの大部分は家事に加えて長寿クラブや高齢者大学に所属しており、様々な文化・学習活動を楽しんでいるようだ。また、近隣の女性たちと毎日のようにお茶を飲みながら会話を楽しむということも特徴的であった。近隣の人々と繰り広げられる「お茶のみ」は朝日町の高齢期の人々、特に女性にとって楽しみであり、毎日の活動の一つとして欠かすことができないものであるようだ。「お茶のみ」について語られたものの中から印象深い語りを紹介したい。

「(普段の生活で楽しみにしていることは?)という問いに対して)習い事やお茶のみだね。みなぐち(地名)辺りの友達でもしょっちゅうお茶のみこーいって、電話よこしてげすよ。」(70歳代後半女性)

「(姑を介護していたときに)ばあちゃんおんぶして外に出ると、みんながお茶飲んでいけて、3件4件、みんな声掛けてくれる。お茶ごちそうになって、ばあちゃんも喜んで、そういうことです。」(70歳代前半女性)

柘植実習の調査報告によると、男性25名、女性32名のうち男性2名、女性17名が日常生活や楽しみとして「お茶のみ」を言及していたという。男女間の参加度の違いについては『2003年度社会調査報告書』を参照していただきたい。

80歳代女性はこれといって決められた役割というものは無いという回答が多く、好きなことをしているということが目立った。地域の集まりには楽しいから参加するといったように地域のために参加するという意識は低いようだ。80歳代男性と同様に身体的機能の低下が集まりの参加への妨げになっているといった特徴がこの年齢層には目立った。

第3章では山形県朝日町における高齢期の人々の役割と活動の特徴をまとめた。結論としては朝日町に住む大部分の高齢期の人々の役割と活動が年齢と性別によって固定化されているということが言える。このことは会田(1996)の農村高齢者の役割と活動の調査で導き出した「活動や役割に関して性と年齢による規定が強い」という結果に一致する。また、近隣者同士の付き合いが「隣組」や「お茶のみ」などの習慣を通して密に交わされているということが特徴として見えた。

第4章 都市部における高齢期の人々の役割や活動の実態とその特徴

本章では都市部の代表として選定した東京都世田谷区における聞き取り調査及び参与観察の結果をもとに高齢期の人々の役割と活動の実態について明らかにしたい。具体的には第1節でインタビュー対象者の属性、第2節で役割や活動の実態とその特徴について事例を挙げながら述べ、第3節では都市部における高齢期の人々の活動の場を2事例紹介する。

第1節 インタビュー対象者の属性

東京都世田谷区における聞き取り調査では65歳以上の8名（男性4名、女性4名）の協力が得られた。

今回、都市部でインタビューの対象となった8名は職業に関して、特徴的な側面を持っていた。その側面とは次の2点である。男性4名は全員、「定年退職」を経験されている対象者であったということ、そして、女性4名のうち、3名は「専業主婦」であったということである。彼らは第二次世界大戦後の高度成長期(1960年代半ば～1970年代初め)に伴い、産業構造が転換しサラリーマン中心の社会で働いてきた世代である。また、当時のサラリーマンの妻は専業主婦であることがほとんどであった。このような時代を生きてきた経験があるということは典型的な都市部の高齢者といえるだろう。また、これらのことは「定年退職」という経験や「専業主婦」が少ない農村部と比較し考察するにあたり、重要なキーワードとなると思われる。

第2節 役割や活動の実態とその特徴

世田谷区の高齢者の典型的な役割や活動の実態を明らかにするために私は次のようなプロセスを踏んだ。山形県朝日町の場合と同様に、インタビュー内容を基に役割や活動について関連した内容を全て抜き出した。そして、5つのカテゴリー別に個別ごとにまとめた。(表4～11)ここでは8人のインタビュー内容の要点を紹介しながら、役割や活動の実態を把握したい。

■ Aさん(男性70歳代前半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Aさんは5歳のときから世田谷区に住んでいる。現在は妻と母親の3人暮らしであるが、最近、母親が体調を崩して近くの病院に入院している。母親の入院後は姉や妹と協力し合い介護をし、Aさん自身は週3～4日程度、病院に通っている。母親を介護することになったことにより、年に2～3回しか会っていなかった姉や妹と頻繁に会うようになったという。Aさんには子供が2人いる。娘夫婦が同じ敷地内に住んでいて行き来はするが、食事などを一緒に摂ったりすることは無い。

Aさんは毎日規則正しい生活を送っている。朝は5時に起床し、6時から7時まで近くの公園でラジオ体操やストレッチ体操をする。特に体操サークルなどという団体ではなく、体操をやりたい人が自然に集まり、みんなで体操をするのである。今では子供から大人まで多いときに100人ぐらいは集まるらしい。Aさんが体操に通う理由は健康のためであり、人と交流を求めて通っているわけではない。体操が終わるとAさんはウォーキングをしながら、きれいな景色を眺めたり、短歌を作ったり、執筆中の論文について考えたりする。この時間はAさんにとってリフレッシュできる時間である。自宅に戻ると、庭の掃除にとりかかる。妻の足の具合があまり良くないせいもあり家事には協力的でご飯を炊くのはAさんの役目になっている。その他の時間は市民大学に行って学習をしたり、ボランティア活動（相談員や教育指導）などを行っている。教育の場で活躍していたAさんはその経験を活かして、学習活動やボランティア活動に励まれている。年を重ねると、職場という組織や子育てから解放され自由になる反面、意欲ややりがいや薄らいでくるとAさんはいう。そこで、Aさんは社会貢献を目標にして相談活動や教育活動にやりがいを持って携わるようにしているのである。

表4 Aさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	子供人権サポートの会での相談員(ボランティア)、母校で後輩の指導、
インフォーマルな役割	母の介護、庭の掃除、壊れかかった物を直す、ご飯を炊く
加入している団体	市民大学、子供人権サポートの会、母校で教師学を後輩に教えるグループ、自主ゼミ
参加している活動	毎朝公園で行われているラジオ体操、市民大学や区民講座での学習、子供人権サポートの会での相談活動、母校の後輩に現場の教師学を話す、自主ゼミ定例会の参加
趣味(楽しみ)	ラジオ体操、ウォーキングしながら短歌を作ったり研究内容を考えたりすること、ボランティア活動など、今行っている活動は全て楽しみでやりがいがある

■ Bさん(男性 70 歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Bさんは生まれも育ちも世田谷区で現在は妻と2人で暮らしている。息子が2人、娘が1人いるが、それぞれ結婚して家庭を持ち自立している。子供に会うのは年に1回程度であり、そのときに孫に会うことが楽しみだという。

Bさんは60歳に鉄道会社を定年退職した後、75歳まで下請け会社の出向し、仕事にやりがいを持ちながら75歳まで働いた。現在は、気の合う仲間が集まって作った「K会」を通しての活動を楽しんでいる。9月には子供たちに昔遊びを教えるイベントがあり、その準備に取りかかっている。この会では長い付き合いがあるので、会員同士は気心が知れた仲間であるという。また、Bさんは30歳からキリスト教会の礼拝に通っており、教会の雑用も担当している。教会に通うことはBさんにとって精神的な恵みを受けることができ、とても大切な時間であるという。

Bさんの趣味は陶芸と写真撮影である。陶芸は世田谷区の外郭団体主催の20名ほどの生徒がいる教室に通っている。写真は民間の教室に自転車に乗って通っている。また、自家用車あるいは地下鉄に乗って絶景ポイントまで行き、その景色を写真に撮るということを楽しんでいる。個人的には世田谷区の地域の集まりには全く参加していない。

表5 Bさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	「K会」会長、教会の総務委員
インフォーマルな役割	庭の手入れ、草取り
加入している団体	カメラ会社主催の写真クラブ、K会、陶芸教室
参加している活動	K会の運営・企画・催し物での活動(子供に昔遊びを教える)、礼拝
趣味	写真撮影、陶芸

■ Cさん(男性 70 歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Cさんは九州出身であるが、会社勤めが始まると転勤を繰り返し、いろいろなところで社宅生活を経験した。世田谷区に住むようになってからは20年ぐらいである。Cさんには娘が2人いるが、今は2人とも結婚して妻と2人で暮らしている。娘達に会うのは正月や盆など年に1～2回位で、九州の親戚にも母親が亡くなってからはほとんど会っていない。

Cさんは60歳に定年退職をするまで、家族を支え、娘達を学校に行かせるために仕事に全部をかけていた。仕事一筋であったCさんは定年退職後の2～3年の間、これからどう生きていこうか、何をしていたらよいのか、と一人で悩み辛い経験をした。今まで仕事を頑張ってきた自分が「ダメな男」になりたくないという気持ちがあったのだ。これからも自分に自信を持って生活していきたくかったのである。Cさんはこの時期を「通過門」と語る。Cさんは自分の生きがいを探すために、市民大学、老人大学、カルチャーセンター、元職場のOB会、俳句教室、囲碁教室、歩こう会（ウォーキングの会）など、あらゆる会に参加し、出会った人と情報交換をしながら、その中で自分に会うものを2～3年かけて見つけていった。Cさんがやっと見つけた活動が今も続いている囲碁や俳句などの活動やOB会での元職場仲間との交流である。同じ趣味や興味がある人との交流は楽しいと語る。これらはCさんにとって生きがいであり、生活の一部となっている。自宅では庭に咲いている花を見ながら短歌を詠み、毎月ある句会で発表している。これらの活動をする根底には健康を維持するためという気持ちもある。

自宅で担当している役割については語られなかった。また、Cさんは「フォーマルな役割」は持っていない。その理由は何らかの組織で役割を持つことによる責任からは解放されたいという気持ちがあるからだ。その結果、個人的に地域の集まりなどには積極的に参加していない。現在は自由な時間を拘束されずに趣味活動を楽しみながら過ごしている。

表6 Cさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	なし
インフォーマルな役割	インタビューからは回答を得られず（家事は全て妻が行っている）
加入している団体	元職場のOB会、囲碁教室、俳句教室、自主ゼミ(欠席することが多い)
参加している活動	元職場のOB会・囲碁教室・老人大学で囲碁をする、散歩、図書館に行って本を読む 元職場のOB会での交流
趣味(楽しみ)	囲碁、俳句、今行っている活動は楽しみであり趣味でもある

■ Dさん(男性 70 歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Dさんは結婚を機に新宿区から世田谷区に移り、世田谷区にはもう 50 年近く住んでいる。Dさんは現在、妻、長女夫婦、孫、そして妻の叔母と 6 人で暮らしている。2 世帯住居ではあるが、妻が体調を崩しているため長女が中心となって家事をしている。Dさん自身も部屋の掃除、ゴミ出し、食器洗いなどは積極的に行う。妻の体調を気遣ってのことである。

Dさんは運輸会社を 60 歳で定年退職し、その後は 68 歳まで運輸会社の嘱託勤務をしていた。運輸会社では社員教育に力を入れて活躍していた。長年勤めてきた会社を辞め過去を振り返ってみると、家庭と職場の往復だけで、近所の人との交流が全く無かったことに気が付く。自宅にいただけでは何もすることも無く、人との交流も限られていたので外の空気に触れたいという気持ちが強くなっていった。また、年を重ねたことで健康についても人一倍気を遣うようになった。その結果、市民大学や健康体操に参加するようになった。

「交流」と「健康」を意識した結果である。このような場で人との交流を持ったことにより、興味関心が同じ人同士で成り立っている自主ゼミに参加したり、仲の良いグループで食事会や旅行会をするなど、Dさんの交流範囲は拡大していった。趣味は読書と野球観戦であり、体操の会で親しくなった友人たちと東京ドームで野球観戦をすることもあるとDさんは語る。現在、Dさんは町内会の班長を任されていて地区の会合や防犯訓練など地域の集まりに積極的に参加している。サラリーマン時代は近所との交流は会ったら挨拶をする程度で近所付き合いが全く無かったが、今は隣近所と仲良く付き合っていきたいという気持ちが強い。一方でサラリーマン時代に共に働いた人たちとの交流も大切にしている。毎年 2 回ぐらい行われるOB会に参加しては昔話をして楽しい時間を過ごすこともDさんにとっては楽しみの一つであった。

表7 Dさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	戦友会の世話役、地区の班長
インフォーマルな役割	部屋の掃除、ゴミ出し、食器洗い、
加入している団体	戦友会、体操の会、市民大学(興味・関心がある講義だけを受講)、自主ゼミ
参加している活動	戦友会の事務的活動、毎週3日スポーツセンターで行われる健康体操に参加、市民大学での学習活動、自主ゼミ定例会の参加、町内会の防犯訓練
趣味	読書、野球観戦

■ Eさん(女性60歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Eさんは栃木県に生まれ短大入学を機に上京する。卒業後2年間は仕事をしている姉のもとで暮らし主に家事を担当していた。結婚後は世田谷区に住み、専業主婦として家事と2人の子供の育児に専念してきた。現在は夫と2人暮らしである。敷地内の別棟には99歳になる姑が住んでいてEさんは毎日食事の用意をする。現在は夫と家事を分担して行っているのが楽になったという。Eさんには兄弟姉妹がいるが、全員で集まる機会は2年に一度程度で、姉妹とは1年に一度、一緒に食事をしたりする。

人の役に立つことが好きなEさんはボランティア的な役割をたくさん持っている。子供が小学生のときにPTA活動をしていたことをきっかけに地域での活動に携わる機会が増えていき、今では民生委員、青少年地区委員、選挙推進委員など地区の「フォーマルな役割」を担っている。Eさんが民生委員を引き受けた理由には自分の母の介護体験が他の人の役に立たせたいという希望があり、その介護経験を活動に活かしている。また、民生委員として活動するためには高齢者を理解することが必要と考え、老人会にも参加するようになった。様々なボランティア活動は現在のEさんにとって生きがいであり、楽しみとなっている。

Eさんは50歳のときに子供達が成人し、母親としての仕事は終わってしまったということにショックを受けた経験があるが、これらの活動がEさんの新しい自分の役割になっていったのである。Eさんにとっての楽しみは他にもある。それは裁縫や読書だ。しかし、最近は視力が低下したことにより裁縫や読書をする時間が減ってしまったと語る。

民生委員や青年地区委員など地域に密着した活動をしていることにより、担当している地区の住人とは顔見知りではあるが、個人としての近所との付き合いは浅い。例えば、葬式の場合は近所で協力して手伝えることは無く、葬儀屋に頼むことが一般的なのだという。

表 8 Eさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	民生委員、老人会会計係、青少年地区委員、お茶会(茶道)の世話役、選挙推進委員、
インフォーマルな役割	家事(夫と分担)、姑の食事準備と配膳
加入している団体	習字教室、自主ゼミ
参加している活動	民生委員活動、老人会運営、青少年地区委員活動、お茶会運営、選挙推進活動、自主ゼミ定例会の参加(年に1~2回)
趣味(楽しみ)	裁縫、読書(視力低下の為あまり出来ない)、サスペンスドラマ鑑賞(夫に付き合う)、姉妹3人で年に一度の食事会

■ Fさん(女性60歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Fさんは昭和24年からずっと世田谷に住んでいる。現在は92歳になる母親と弟と3人で暮らしている。Fさんは高校卒業後、母校の事務職として63歳まで働いた。仕事はFさんにとって生きがいであった。しかし、退職後に何をすべきかと悩むことはなかった。なぜならば、家事や母親の世話をするという役割があったからである。Fさんは「母の世話が良かったから切り返しはうまくいったと思う。」と語る。63歳まではフルタイムで働いていたFさんであったが、現在は母親の世話、特に母親のために3度の食事を作る時間が一日の生活の中で最も比重が高い。

退職してから2年という月日が流れ生活のリズムがつかめた頃に、Fさんは余っている時間をどう過ごそうかと考えるようになった。また、運動不足になっていることも気になっていた。ある日、立ち寄った区役所に置いてあった「老人大学」のパンフレットを偶然に手に取ったことがきっかけで「老人大学」の存在を知り入学し、今では週1回、「老人大学」での学習を楽しんでいる。老人大学以外での活動の場も拡大し、毎月1回は「仏教(法華

経)」、毎月2回は「古文書」について学んでいる。また、体操教室に通ったり、駒沢公園でウォーキングを行うことを通して運動不足を解消し、体力の増進をはかることで、趣味の登山を楽しんでいる。20歳代から親しくしている5~6人の仲間で登山をすることを毎年楽しみにしているという。しかし、Fさんは母親を一人で自宅に残して外出してしまうことに抵抗感がある。高齢の母親のことが心配であるからだ。例えば、老人大学で午前から午後にかけて行われる講義を受講するときは、昼になると自宅に戻り母親の様子を見てくるといふ。Fさんはフルタイムで仕事をしていたということもあり、地域の集まりなどには参加していない。近隣者とは挨拶をする程度の付き合いである。

表9 Fさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	なし
インフォーマルな役割	家事全般、母親の世話
加入している団体	世田谷区老人大学、古文書研究会、仏教の学習の会、体操教室
参加している活動	老人大学や研究会での学習活動、体操
趣味(楽しみ)	登山、学習活動

■ Gさん(女性70歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

生まれも育ちも世田谷区であり、結婚後もずっと世田谷区に住んでいる。学校を卒業してから3年だけ都内の医薬品会社に勤務経験があるが、結婚後はずっと専業主婦であり、家事と育児に専念してきた。Fさんには息子が2人、娘が1人いるそうだが、皆結婚してそれぞれの家庭を築いており、現在は夫と2人暮らしをしている。家族全員がそろうのは年に1~2回程度であり、その日を楽しみにしている。

表10からも分かるようにFさんの役割や活動は多種多様である。1週間のうち6日間も外出する。また、決まっている活動日以外にも仲間同士で旅行や食事に行ったりすることも多い。このようにFさんは毎日のように何らかの活動が予定に入っていて忙しい日々を送っているが、Fさん自身はこれを嫌だと思ふことは無く、とても楽しい時間であるのだ。その理由は多くの活動をしたことによって、友達が沢山できてコミュニケーションの広が

りが持てたからだという。何かの活動を通して、友達と過ごす時間がFさんにとっては何よりも大切な時間なのである。ただし、近所との付き合いは挨拶程度であり、近所の人とお茶を飲むといったような親しい付き合いはない。

表 10 Gさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	「S会」役員、キリスト教会での会計係
インフォーマルな役割	家事全般、弟が経営している書店の帳簿付け、母の介護(姉妹3人で交代で介護)
加入している団体	S会、K会、フォークダンスクラブ、コーラスクラブ、自主ゼミ、
参加している活動	「S会」での運営・企画及び催し物の参加、市民祭りで子供に昔遊びを教える、夫とウォーキング、「K会」年報作成の手伝い、教会で戦争体験を話す、地域の集まりには個人的には参加しない(挨拶程度の付き合い)
趣味(楽しみ)	フォークダンス、コーラス、海外にいる友人との文通、友人との食事会

■ Hさん(女性70歳代後半)の場合

【インタビューから読み取れた役割と活動】

Hさんは夫とともに北陸地方の出身であるが、夫の転勤をきっかけに世田谷に住むようになる。Hさんは結婚後、子供の育児と家事に専念してきた専業主婦だ。夫が定年退職(退職後も80歳まで働く)を向かえ、子供が独立してからも、毎日の食事の準備、掃除、洗濯などあらゆる家事は結婚当初と変わらずHさんの役割である。時折、夫が手伝うこともあるが、家事の大部分をHさんがこなす。Hさんには3人の娘がいるが、会うことはほとんど無い。

夫が定年退職、子供が自立してからは少しずつ自分の時間を持つことができるようになり、その時間を利用して「歩行会」に入った。Hさんはどちらかというと自分から積極的に人との交流することはなかったので、「歩行会」などの交流の場に足を運べば、必然的に人との交流を楽しむことができるのではないかという期待があった。実際に期待通りの結果となった。しかし、現在は足腰が弱くなったことを理由に参加していない。その代わりに「老人大学」に入学し、週1回通っている。友人もできてHさんにとって楽しみな日となっている。その他の楽しみはHさんが育てた花をデジカメで撮影しパソコンに取り込んだ

り、メールを送ったりすることである。パソコンを使って楽しむことはHさんの趣味である。

Hさんは65歳のときに夫の友人の奥さんと船で海外旅行に出かけた。このとき、結婚後初めて自分の人生を楽しむことができた。今までは夫のために尽くしてきたが、これからは自分の人生も楽しもうと思うようになったのだ。Hさんは「私は主人の付属だったから、今は自分の人生を楽しみたいと思うようになったの。」と語る。この海外旅行は人との交流を深めていこうとHさんが考えた一つの要因であった。

表 11 Hさんの役割と活動

カテゴリー	種類
フォーマルな役割	なし
インフォーマルな役割	家事
加入している団体	老人大学
参加している活動	老人大学での学習活動
趣味(楽しみ)	庭の手入れ、パソコン(メールのやり取り、画像編集)、デジカメで自分が育てた花を撮る

以上のように、都市部に在住の8名の役割や活動の実態をカテゴリー別に分けて把握してきた。山形県朝日町の場合と同様に、東京都世田谷区においても高齢期の人々の役割や活動にある特徴があることに気が付いた。その特徴とは次の2つである。

(1) 役割や活動の多様性

8名のインタビューを行ってみて印象深かったことは、彼らの役割や活動が山形県朝日町に比べ、多種多様であったということである。

例えば、「加入している団体」や「参加している活動」は、朝日町の高齢者のように「老人大学」や「市民大学」など自治体が提供している場で活動している人はもちろんいるが、その他にも民間のカルチャー教室やかつて勤めていた企業のOBが主催する教室など、活動の場は幅広い。また、同じ興味関心をもつ人々が集まって作られた「自主ゼミ」に参加している人もいる。逆に「老人大学」にしか通っていない人もいる。役割に関しても地域の役員や所属している団体の世話人など「フォーマルな役割」を担っている人もいれば、8人

中3人は「フォーマルな役割」を全く持っていないという人もいた。

このように、今回、インタビューの対象となった世田谷区の高齢者の場合は役割や活動が多種多様であり、類型別に分けて一般化することは難しいといえる。むしろ、「多様性」を持っているということ自体が東京都世田谷区の特徴ではないだろうか。ただし、「インフォーマルな役割」に限っては次のような傾向があった。それは女性が「家事」の大部分を担っている場合が多く、性差が存在していたということである。夫が定年退職しても、専業主婦としての役割はそのまま維持されているようだ。しかし、男性が全く家事を担当しないというわけではなく、配偶者の健康上の問題などにより部分的に手伝っているという回答も2事例あった。

(2) 希薄化している近隣関係

インタビューの対象者の大部分が地域の集まりに積極的には参加していないということをお話したことが特徴的であった。町内会の集まりについてある人は次のように語る。

「そう。ある意味、町内会は有名無実。お金は払うけど、何の行事も参加しないし、町内会の回覧板が回ったって旦那はほとんど見ないだろうし。町内会…隣組みたいなものはまず、有名無実じゃないかな。」(70歳代前半男性)

「皆さん同じですよ。あんまり回覧板を見てもこう…判子だけばっと押して回しているような感じがしますね。」(70歳代後半男性)

「町内会」という地域の組織は存在しているが、地域の人々にとっては「町内会」とは回覧板を回すグループというぐらいの組織としてしか認識されてないようだ。このことから、ここでいう「町内会」とは相互扶助や協力性の機能が強く働いていない組織なのではないだろうか、ということが推測できる。Dさんに限っては「町内会」の班長を任されているということもあり、地区の会合などには積極的に参加されているということであったが、全体的にみると、地域の集まりの参加度は低いようである。

また、近隣者との関わり合いは非常に浅い。挨拶する程度の付き合いであるということが特徴的であった。近所付き合いについてある人は次のように語る。

「やっぱりね、少ないですよ。もうちょっと多くてもいいのかなって思いながら、あまり深入りするとうるさがるのかなと思うしね。」(60歳代後半女性)

「引越していらっしょるとご挨拶にいらして、会うとご挨拶して、出くわせば、話しをする程度で…。わざわざ訪ねていってということまではない。」「そういうこと(お茶を飲んだりすること)は全然無いですよ。皆忙しいと思うし。」(70歳代前半女性)

このような語りから近所の人々に関する機会はあまり無く、挨拶程度の表面的な付き合いであるということが分かる。その一方で自主ゼミや何らかの教室などで知り合った気の合う仲間とは一緒に食事をしたり、旅行に出かけたりなどに関わり合いは深いという特徴を持っていた。その関わり合いの深さというものが次の語りに表されている。

「帰りに皆でお食事したり…。お茶もしたりね。『k会』というのは月に1回あるけれども、その他に催しものあって…。昨日は暑気払いがあって、そこで さんにお会いして。昨日は暑気払いでね、中華料理食べてきたの。結構楽しくいろんなことを話していましたよ。もう敗戦の日が近いから、そういう話とかね、皆で大変だったとか、昔の話だとか。」(70歳代前半女性)

「私は趣味というのはそんなに無いんですけど、あの～まゝグループでカラオケに行くとか。」「それから体操グループとね。みんな好きなもんだからね。それからね、旅行もね。仲間から声がかかるとね、大体私が立案して私がリーダーでみんな手続きを…ツアー旅行ですけどね。」(70歳代後半男性)

以上のようなことから、近隣の人々との交流よりも、興味関心が同じ者同士が集まる場での交流の方がインタビューを行った世田谷区の高齢者の役割や活動の内容として比重が高いといえる。

第3節 高齢期の人々の活動の場

都市部に暮らす高齢期の人々がどのような活動をしているのか、実際に活動の場に参加することで活動の場の特徴を知ることができると考え、参与観察を実施したので以下に報告する。

(1) 「S研究会」での参与観察

「S 研究会」では、世田谷区の閑静な住宅街にある宮坂区民センターにて2ヶ月に1回、定例会が開催されている。「S 研究会」とは「世田谷市民大学」⁽⁸⁾の同じゼミで勉強していた人同士が始めた自主ゼミである。参加者は80歳前後の男女であり、毎回社会的なテーマを設定し、議論が展開される。会員数は14名(男性10名、女性4名)であり、そのうちの12名が世田谷区民、2名が八王子市民という構成である。

私は2004年7月20日、9月17日のあわせて2回に渡り、定例会に参加した。ここでは7月20日の定例会と9月17日に行ったグループインタビューの結果について報告する。

■ 「S 研究会」定例会の参与観察の記録

【第1回目：7月20日】

今回の定例会の参加者は6名(男性4名、女性2名)であった。38℃という猛暑の中の開催であったために欠席をされる方もいると世話人のpさんは話される。会場までは自転車や原付自動二輪車で通ってくる方もいれば、宮坂区民センターのすぐ隣の世田谷線を利用し通ってくる方もいる。

定例会は13:30からであるが、世話人pさんは13:00頃に一足早く会場である区民センター3階の小会議室に来てお茶やお菓子の準備を始める。部屋は机4つと椅子12脚があり、対面している机にはおせんべいや雷お越しなどのお菓子が並ぶ。しばらくすると、男性(qさん)が到着する。いつも少し早めに来て会場の準備を一緒に行うらしい。彼ら2人が今日の出席者は誰なのか、外の暑さのすごさについて雑談をしていると、あっという間に13:30になる。この頃になると参加者が次々と到着し、適当に席について賑やかな会話が始まる。ある人は戦友会で発行した文集を見せ軍隊生活の思い出を語り、ある人は欠席者の心配や猛暑について語っていた。

参加者がそろったところで、世話人pさんが司会を務め、定例会が始まった。本日の定例会は「暑気払い」を兼ねており、暑さに負けないようにとビールで乾杯をし、参加者は美味しそうに飲んでいて。また、世話人pさんは大国魂神社で7月20日にしか売っていないという「からす扇」を参加者に見せた。「からす扇」は扇子に鳥の絵が描かれており、これで扇ぐと、穢れを追い払い幸運をもたらすとされているらしい。参加者の皆が幸福になるようにと一人一人にその扇子を回し、扇いでいた。暑気払いらしい粋な計らいである。

13:45になると、世話人pさんはお手製の資料を配布し、本日のテーマを参加者に伝える。そして、議論が始まる。

テーマは朝日新聞のコラム欄に掲載された参加者 x さんのコラム（「無名戦士慰霊記念碑」が欠けてしまっていることに気がついた x さんが戦争犠牲者のことを忘れかけているのではないかと提言している。）に対する意見を求めるものであった。新聞に掲載されたことに対して、参加者は x さんを称賛し参加者全員で喜び合っていた。意見は積極的に交わされ、司会者が話題を変えなければ、永遠に続きそうなほど活発な議論が展開されていた。

15:00 から 5 分ほどの休憩を取り、後半は健康を意識したテーマで話が展開された。y さんが「呼吸法」について説明し、参加者全員で実際に「呼吸法」を試した。また、z さんから「元気の秘訣」についての説明があり、参加者は熱心に耳を傾けていた。

最後に世話人 p さんが作詞をした「S 研究会」の数え歌が発表された。また、「暑気払い」のイベントとして福引が行われ、本日の定例会はお開きとなった。

定例会が終わり参加者は帰宅すると思われたが、そのまま区民センターに隣接する喫茶店に足を運んだ。アイスコーヒーを飲みながら、介護問題、病院の対応、高齢者が生活しづらい環境になっていること（例えば、携帯電話やパソコンの普及）など高齢社会における問題点や秋の旅行の企画など様々な話が展開されていた。定例会では語られないような彼らの生活部分に関する内容であった。1 時間ほどおしゃべりをしたあと、解散となった。

【グループインタビューの結果】

9 月 16 日の定例会の後半は私が参加者の皆様にインタビューをしたいということをお願いしていたこともあり、1 時間ほど貴重な時間を得ることができた。参加者自身がなぜこの会に参加しているのか、参加する意義は何か、ということを中心に参加者全員に質問した。ここでは、印象深かった回答を 2 事例紹介する。

ある女性は「S 研究会」に参加する意義を次のように語っている。この女性の場合は異性との交流の場と語っていることが非常に印象的である。

「あの～人間の～人と人との交流を楽しむというのが…ひとつ。異性との交流の場というのも、それも主人が、亡くなった主人が女の友達も大切だけど、男の友達も大切だから積極的に交わるようになってというのが亡くなった主人がよく言っていたんですけど。それには極めて健全な男女交流の場ではないかと思います。あとはもう知的な刺激とか、知識を得る、そんなものです。」(女性)

ある男性は「S 研究会」に参加したことで自分の存在を他者が認めてくれたことにより、

自分が生きていることの喜びを語っている。

「91 過ぎました。先月で、それで、88 になった 3 年前に私みたいな厄介なものが邪魔をしてここにいたんじゃ申し訳ないから、『辞めさせてもらいます！』と言ったら、皆さんは『お前いいよ。ついて来いよ。ここにいるだけでいいから。』って言われて。この厚情に甘えて、そしてついて来ました。もう一人一人に感激と感謝！だから、私はね、この会に来ているためにテレビの見方が違って来た。観るものが、新聞の見方も違って来た。」(男性)

グループインタビューの結果から、参加者が「S 研究会」に参加する意義としては「人との交流を深める」「知識を得る」「自己実現の場である」「様々な刺激を受ける」の 4 点にまとめられた。

前述した 2 つの事例やグループインタビューの結果のまとめから、「S 研究会」に参加することは、高齢期を生きる彼らに楽しみや喜びを与え、生き生きと高齢期を過ごす原動力となっているということが推測できる。

(2) 「世田谷区老人大学」での参与観察

2004 年 10 月 19 日、20 日に「世田谷区老人大学」主催の「第 2 回老人大学学園祭—シニアカレッジフェスティバル—」が開催された。学園祭ではコース別に学習成果発表したり、コーラスなどの演芸を披露していた。また、写真や絵画などの個人作品の展示会も行われていた。ここでは 19 日の学園祭の様子を紹介したい。

■ 「第 2 回老人大学学園祭—シニアカレッジフェスティバル—」の参与観察の記録

【10 月 19 日】

老人大学が設置されている老人会館に一步足を踏み入れると、賑やかな声が聞こえてきた。受付係と思われる女性が二人、私を温かく迎えてくれ、手作りの学園祭案内パンフレットを手渡してくれた。「2 階で展示会をやっていますのでどうぞご覧になってください。」と丁寧に案内され、私は展示室に向かった。展示室前には休憩所が設けてあり、高齢者が何人かで談話を楽しんでいた。

午前中から始まっている展示会では各コースで学習した成果をグループでまとめたポスターや写真、絵画、木彫り、書道、手芸などの個人作品が展示されていた。展示室には受

講者が展示室係として活躍し、閲覧者に案内をしていた。展示作品の中でとりわけ目立っていたのが、紙いっぱいに描かれた緑道周辺の地図である。この地図上には受講者が自らの足を運びその地域について調査した内容が写真付きで細かく書かれていた。そのポスターの前で立ち止まっている私に「何かの取材ですか。」とある男性が声をかけてきた。その男性はこの作品の作成者の一人であった。私が見学に来たことを伝えると、ポスターの製作過程を熱心に説明してくれた。猛暑の中、皆で2日間も緑道を歩いたことは大変であったが、充実していたと彼は語った。また、その男性は老人大学での出来事をまとめた新聞をくれた。その新聞は彼が毎月1回編集しているという。本物の新聞のように写真入なのでとてもわかりやすい。かつて編集の仕事をしていたかと思わせるような腕前である。本の編集のお仕事をされていたのかどうか尋ねると、「違うよ。単なる趣味。これはパソコンで簡単に出来るんだよ。」と笑いながら答えた。

展示室には熱心に作品をデジカメで撮影している人、閲覧しながら仲間同士で作品のすばらしさを褒めあったりして、終始和やかな時間が流れていた。

午後になると、地下の体育館で開会式と公開講座が催された。参加者は100名ぐらいで女性より男性の方が多い印象である。現役生ではなく、卒業生も多く参加しているらしい。公開講座のひとつに「世田谷区の祭囃子」というテーマの講座があった。会場内に実際に趣味として囃子を演奏する男性がいて講師より紹介された。その男性は会社を退職したことを機に、友達を作ろうと思い、囃子を始めたのだという。今では神社での祭りなどで祭囃子の奏者として活躍し、趣味活動を楽しんでいると笑顔で語った。

(3) 異なる性格を持った2つの活動の場

「S研究会」と「世田谷区老人大学」という2つの活動の場を観察したことで、都市部の高齢期の人々の活動の場の多様性に気がつくことができた。

1) 同じ興味・関心を持った仲間の交流の場

「S研究会」は「自主ゼミ」ということもあり、参加者が同じ興味・関心を持ち、1つのテーマに関して深く追求するタイプの活動の場であった。また、研究会が発足した当時から面識がある者によって参加者が構成されていたことによって、参加者同士のつながりも深いといえる。都市部では同じ興味・関心を持った仲間が交流できる場が成り立つのだと思われる。フィッシャー（1984）は単なる小集団が活力のある、活動的な下位文化になる

ためには十分な大きさの数、つまり「臨界量」が必要であると述べているが、まさに「S研究会」はフィッシャーのいう「臨界量」によって影響を受けている集団であるといえる。活動に必要な大きさが確保できたことによって、「S研究会」という活動の場は成り立っているであろう。

2) 活動を通して楽しみを見つける場

「世田谷区老人大学」は区が主催している活動の場であるため、誰もが興味・関心を抱くことができるようにと数種類のテーマが活動内容として用意されている。この中から参加者自身が選択できるようなタイプの活動の場であった。参加者は学習活動や今回の学園祭のような行事を通して、参加者同士のつながりを深めながら楽しみを見つけていく場であると思われる。また、公開講座や自分とは異なるテーマで活動している参加者と触れ合うことで様々な情報を得ることができ、高齢期の人々の役割や活動に大きな影響を与える場であるともいえるのではないだろうか。

第4章では東京都世田谷区に暮らす高齢期の人々の役割や活動の特性を述べてきた。結論としては、世田谷区に暮らす高齢者は朝日町に暮らす高齢者に比べると、役割や活動の選択肢が多いということである。また、近隣者同士の付き合いは浅く、同じ趣味や関心を持った仲間たちの間で親密な関係が生まれるということが分かった。

第5章 考察

これまで高齢期の人々の役割や活動を農村部（山形県朝日町）と都心部（東京都世田谷区）の2つの地域のインタビュー内容から高齢期の人々の役割や活動をカテゴリー別に抽出し、特徴を見出してきた。本章ではその2つの地域の特徴を比較することで両地域の相違点を導き出したい。そして、なぜ相違点が生まれるのか、ということを経験的条件と照らし合わせながら分析していきたい。具体的には2つ地域における高齢期の人々の役割や活動の特徴の相違点をまとめ、その相違点を社会的条件と関連させて考えていきたい。

第1節 2つの地域における役割や活動の特徴の相違と社会的条件との関連

これまで2つの地域の高齢者の人々の役割や活動の実態をカテゴリー別に把握し特徴を見出してきた。その作業を行っている中で私は2つの地域に特徴の相違があるということに気が付いた。その相違とは次の3つである。

(1) 役割取得のプロセスの違い

ここでは個人のライフコースに焦点を当てて考えたい。大久保孝治ら（1995）によると、個人のライフコースを構成する要素として「家族経歴」「教育経歴」「職業経歴」などがあり、これらが相互的に作用しあうことで個人のライフコースが成立すると述べている。ここで注目したいのが、「職業経歴」である。「職業経歴」の定義を大久保らは「仕事という領域の中で生じる役割移行の道筋のことで、就職、転職、転勤、休職、失業、昇進、定年退職といった出来事から成り立っている。」と述べている。このような「職業経歴」が朝日町と世田谷区の高齢期の人々では大きく異なっているのではないだろうか。高齢期に直面したときに、これらの経歴が大きく異なることで彼らが役割を取得していくプロセスに多大な影響を及ぼすのではないかと考えられる。では、朝日町と世田谷区の典型的な高齢期の人々の「職業経歴」にはどのような違いがあるのか、具体的に説明したい。

1) 朝日町の役割取得のプロセス

前述したように朝日町は農業（特に果樹栽培）が盛んな地域であり、高齢期に入っても現役として働いている人が4割近くいた。また、子供に主導権を譲っても何らかの形で農業に携わっている人も少なくなかった。ある男性は次のように語っている。

「職業は農家。現在も一人でやっております！現役で。今もこの年で耕運機回して畑全部自分でやっています！野菜から何から全部作っております。」(80歳代後半男性)

このようなことから朝日町の典型的な高齢期の人々（ここでは男性に限定）は一般的なサラリーマンが経験するような「定年退職」という経歴を持たない人が多く存在するとうことが分かる。これは「定年退職」によって引き起こされる急激な生活上の変化を経験することは無いということが推測される。急激な変化を経験しなければ、ライフコースの断絶も無く、役割や活動自体が大きく変化するということも無いだろう。緩やかな変化の中で自分の役割を取得していくというパターンが多いのではないだろうか。

2) 世田谷区の役割取得のプロセス

世田谷区の典型的な高齢期の人々はどうであろうか。既述したように世田谷区は第三次産業人口の割合が非常に高い地域である。その背景には戦後から高度成長期にかけて産業構造が転換し、サラリーマン家族の増加が大きく関係している。このような世田谷区でインタビューした男性4名全員と女性1名は「定年退職」を経験している。高度成長期にサラリーマンとして会社に貢献してきた彼らにとって、ライフコースにおける「定年退職」という「職業経歴」は危機であり、生活体系を再調整する必要性に迫られることになる。このような急激な変化に対応するために新しい役割を取得していかなければならない。ある男性は「定年退職」を「通過門」と名づけ、生活体系を再調整するための苦労を次のように語っている。

「仕事に全部をかけていたわけでしょう。全て家族を育てる、子供を学校に行かせる…全て仕事をしながら給料をもらいながら娘だけでも大学に行かせるとか…全てをそうやっておったのが切れるわけだから、これから一体何をやっていけるんだっていう一つの…あれが一つの通過門ですよ。あれを2~3年で抜けてきたらもう落ち着きましたよね。」「考えたり悩んだりしましたよ。やっぱり自分をダメな男にしたいくないっていうのがありますからね。せっかく長年、良かれ悪しかれ頑張ってきてこうなのに。これからは自分に自信のある生活をしていかなきゃならんのに。でも何をしたいかさっぱり分からんのですよ。その辺が落ち着くまでは大変だったですね。誰にも言えないですよ。なかなか。女房にも言えない。(中略)何を生きがいにして俺はやっていくんだっていうのを無くしたわけだけ

ら…。それを探るのは2～3年はかかりましたよ。」(70歳代後半男性)

「定年退職」とは今までの生活パターンを変更するということであり、かなりのストレスとなるということが分かる。前述した男性が語ったように「通過門」を通るという経験は高齢期の人々の役割や活動に大きな影響を及ぼすということが考えられる。朝日町とは逆に世田谷区では急激な変化の中で役割を取得していくパターンが多いのではないだろうか。

以上のようなことから、2つの地域における役割取得のプロセスは「職業経歴」によって、大きく異なっているということが考えられる。「農業」を職業とする高齢者が多い朝日町とサラリーマンとして働き「定年退職」を経験する高齢者が多い世田谷区では役割取得のプロセスが異なるのである。高齢期の人々の役割は産業構造と結び付けて考えることができると思われる。

(2) 役割や活動内容の選択幅の違い

今回の2つの地域で行った調査結果から、両者の役割や活動内容の選択幅に違いがあるという印象を受けた。

1) 朝日町の限られた選択肢

朝日町では役割や活動の内容が固定化されていた。例えば、「葬式の手伝い」「人足」「地域の集まり」など、その地域住民が必ず担わなければならない役割というものが存在していた。これは地域の規範が彼らの役割を固定化させていると捉えることができる。とりわけ「隣組」という地域組織形態が彼らの役割に大きな影響を及ぼしているのではないだろうか。主な役割を自ら選択するというよりも、すでに地域組織で用意された性別あるいは年代ごとの役割を担っているという印象である。特に農業を生活の基盤としている地域では地域の連帯は必要不可欠であると考えられる。連帯を維持するために役割は常に用意されているのであろう。用意された役割があることによって、自分のライフコースを予測できると共に、役割のモデルとなる人物が多数存在しているということも考えられる。ある女性は役割のモデルについて次のように語っている。

「誰それさん、88歳の年とった。おれらもそれまで負けないで生きんべね〜。」って言うの。そういう、意欲がわいてくるのね。80歳くらいの人に『お前、まだ、畑仕事すんの〜。そしたら私、7年もしなけねばならない。』って。『ちゃん見て頑張っかなあ〜。だと、私あと7年も畑仕事する〜』って言うて。」(70歳代前半女性)

この女性は自分より年上の女性が80歳になっても畑仕事を行っている姿を見て、自分も頑張らなくてはという意欲を持ったのである。役割のモデルが存在することによって彼女自身が高齢期の役割について予測することが可能になってくるのではないだろうか。

このように、用意された役割があるということは、個人が自由に役割を選択することは出来ないという側面もあると思われる。つまり、地域の規範が個人の役割の選択幅を狭くさせていると捉えることもできるのである。

朝日町における活動の選択幅も狭い。例えば、どのような活動しているかという問いに対して「長寿クラブ」や「高齢者大学」での活動を答える高齢者が非常に多く、世田谷区の場合と比較すると回答に多様性は見られなかった。多様性が見られなかったのはなぜなのだろうか。その答えのひとつとして移動範囲の狭さということが関係していると考えられる。朝日町の場合、高齢者が町外に出かけることを困難にさせている。なぜならば、交通システムが未発達であるからだ。鉄道路線は無く、路線バスの運行本数も少ない。バスやタクシーなどを使ってカルチャー教室など様々な活動の場がある中心地に行くには時間もかかる。結果的に朝日町の高齢者の活動の場は徒歩で移動が可能な朝日町内に限られてしまうということになる。ある女性は移動範囲が狭いことにより、活動の幅が狭くなっているということを次のように語っている。

「やっぱり便利(交通の便)が悪いね。遠くて...中心地からな。テレビとかチラシとかで美術館とかなんかいいの来るべ? そういうのは全然触れられないから、(中略)ここ山だから不便だなんて感じのがそれ。」(60歳代後半女性)

2) 世田谷区が多様な選択肢

世田谷区の場合は朝日町と相反する結果であった。既述したようにインタビューからは彼らの役割や活動が多様多様であるということ分かった。また、朝日町に存在する「隣組」のような地域組織による地域の規範というものはインタビュー内容から分析する範囲で

は見受けられなかった。このことは地域の規範が個人の役割を固定化させず、多くの選択肢から自由に役割を選択することが可能になっていると考えられる。つまり、朝日町に比べると役割の選択幅は広いということである。しかし、世田谷区の高齢者は用意された役割を担うのではなく、自らが自分の役割を見つけていかねばならないということの意味するのではないだろうか。役割が用意されていないということは役割喪失期にあたる高齢期の人々にとっては危機に陥りやすい状態を作ってしまうのかもしれない。

朝日町とは逆に世田谷区の高齢者は活動の選択幅も広い。朝日町の場合と対比させて考えてみると、交通システムが発達しているということがおおいに関係しているようだ。ある男性は世田谷区内はもちろんのこと、区外にも足を運んで様々な活動をしている。次のような発言はそれを裏付けている。

「ここはね、どこに行くにもね、差し支えがないね。今はシルバーパスが結構使えるしね。だから結構都心までね、行かれます。大江戸線だとかね、それから都営新宿線だとか、三田線だとか。結構ありますよ。都営地下鉄はね。」(70歳代後半男性)

「ここは東京、この辺に住んだ人は分かるだろうけど、足の便がね、渋谷、新宿、ものすごくいいわけです。バスでも電車でも、渋谷、新宿に行く人は今もう、働く人でも若い人にとっても、ものすごく便利だと思うんですよ。(中略)仕事以外でも趣味でもね、芝居観にいこうとかなんとか、映画に行くでもなんでも、足場がいいですよ。とにかくどこに行くんでもいい。」(70歳代後半男性)

このように交通システムが発達していることが、世田谷区の高齢者たちの役割や活動の選択幅が広い1つの要因と考えることができそうである。

以上のようなことから、地域の特性が高齢期の人々の役割や活動の選択幅を変化させているということが考えられる。

(3) 近隣関係の違い（交流範囲の違い）

朝日町と世田谷区の高齢者の役割や活動を比較してみて、とりわけ目立った違いが「近隣者との交流」に関してであった。

1) 朝日町の「近隣関係」は深い

朝日町の「近隣関係」は非常に深い関係であるということがいえると思われる。その例として「お茶のみ」という習慣や「隣組」という地域組織を挙げることができる。

朝日町では高齢者（特に女性）が近隣者と毎日のように「お茶のみ」をしており、近隣者と密な交流をはかっていた。インタビュー内容から彼女達は近隣者との間での「お茶のみ」を毎日の日課にしており、活動の一部分として欠くことはできないものであると捉えることができた。2人の女性は「お茶のみ」に関して次のように語っている。

「【普段どのようなことをしているかという問いに対して】 部落でお茶のみ仕事。(中略)お茶のお使いい
ただと、その家に喜んで、お茶をいただきにいきます。それで、漬物とか、お菓子とかそうなってい
ろいろな四方山なはなしをしたりして、楽しむできます。」(70歳代後半女性)

「『ちょっと、運動のために歩いて来~い。』、『何々作ったからお茶飲むべや』ってそういう風に(お茶の
みに)呼んでくるの。(中略)『今、ちゃんと誰それが来たから、かぼちゃ食べてんだ。煮たから。早
く、ぶ~ってバイクで来い。』」(70歳代前半女性)

前者は「お茶のみ」を仕事と語り、日常生活の一部として捉えている。また、彼女にとって近隣者と「お茶のみ」をすることが楽しみな活動であるということが分かる。後者の語りからも近隣者との「お茶のみ」が日常的なものであるということが見えてくる。彼女達にとって「お茶のみ」とは近隣者達との大切な交流の場となっているのだろう。

「隣組」という地域組織によって近隣関係が密になっているということも朝日町ならではのことである。「隣組」という地域組織の一員であるという自覚は、おのずから相互扶助と協力性の機能を果たすための役割を遂行することにつながるのだと考えられる。既述したように「人足」や「葬式の手伝い」のような役割の存在は近隣関係が密であることを証明してくれる。近隣関係が密であることも地域の連帯性を重要視する農村部ならではの特徴といえるのではないだろうか。

2) 世田谷区の「近隣関係」は浅い

インタビュー内容からは世田谷区の高齢者たちの間では「近隣関係」は浅い関係であるということが分かる。朝日町のような近隣者たちとの間で繰り広げられる「お茶のみ」という習慣は存在しない。また、「隣組」のような地域に根付いた組織がないため、地域住民の一人としての役割や活動を遂行している機会は非常に少ない。このように世田谷区の高齢者

たちの「近隣関係」は朝日町のそれに比べて浅く、近隣関係の中で役割や活動を見出すことは少ないが、彼らは他の場で人間関係を営むことで自分の役割や活動を見出していると思われる。

例えば、朝日町のような「お茶のみ」などを通して近隣者と交流する機会は無いが、それに代わるものとして、サークルやゼミの会合のあとに気の合った仲間同士で喫茶店に立ち寄り、旅行に行ったりという活動を挙げることができる。ここでその例を紹介しよう。

「S 研究会」の定例会に参加した時のことである。定例会が終わり参加者は帰宅すると思われたが、そのまま定例会会場に隣接する喫茶店に足を運んだ。アイスコーヒーを飲みながら、介護問題、病院の対応、高齢者が生活しづらい環境になっていることなど高齢社会における問題、世間話、秋の旅行の企画など様々な話が展開されていた。定例会では語られないような彼らの生活部分に関する内容を1時間ほどおしゃべりしたあと、解散となった。

事例から、世田谷区の高齢者達は朝日町の近隣関係のようなものを他の場で作っていたということがいえるのではないだろうか。同じ趣味や価値観を持った人々が集まる喫茶店での一時や旅行は朝日町の「お茶のみ」と同じように高齢者にとって大切な交流の場となっているのだと思われる。

このようなことから、朝日町の高齢者と世田谷区の高齢者とでは人との交流範囲が異なり、それによって役割や活動も異なってくると考えることができる。

朝日町の高齢者の交流範囲は地縁に基づく狭い範囲で構成され、その中で役割を担い活動していると思われる。朝日町のような農村部では人と接触する機会が限られているため、近隣者以外の人との交流を持つこと自体が難しいのかもしれない。また、隣組という地域組織が機能していることにより、地縁による結びつきは強いものといえるだろう。地縁に基づいた狭い交流範囲の中では地域の規範が高齢者の役割や活動の選択性を少なくさせていると共に交流する相手がすでに決まっていると考えることもできる。

これに対して世田谷区の高齢者の交流範囲は広いといえるのではないだろうか。朝日町のような地縁に基づくものではなく、多様な選択肢の中から選んだ、自分と類似した者同士が集まる空間の中で人との交流が繰り返し広げられていると考えられる。世田谷区のような人口が多い地域では多種多様な人々と接触する機会が多いと思われる。その中から自分から交流する相手を選ぶことは、彼らの役割や活動の選択性も必然的に多くなっていると考

えることができる。

以上のようなことから、高齢期の人々の役割や活動は高齢者たちの交流範囲によっても大きく変化してくると考えられる。また、この考察はC. S. フィッシャーが主張した「下位文化理論」が大きく関係するのではないだろうか。今回インタビューした高齢者たちは世田谷区という人と接触する機会が多い都市部で繰り広げられる多種多様な交流の場から自分に合う交流の場を選択し、その交流の場で彼らの役割や活動を見つけ出している。これは、都市は接触可能な人口量が多いことにより、下位文化を増殖させ、この中で同じ関心があるもの同士が同類結合し、パーソナルネットワークを作り上げていくという「下位文化理論」にあてはめることができるといえよう。「下位文化」が世田谷区の高齢期の人々の役割や活動に関与していると思われる。

終章 社会的条件によって変化する高齢期の人々の役割や活動

本研究で山形県朝日町と東京都世田谷区の高齢期の人々の役割や活動を比較したことで、2つの地域に役割や活動の特徴に違いがあることが分かった。また、その特徴を社会的条件と照らし合わせて分析したことにより、次の3つの知見を得ることができたので報告する。また、この研究の限界と今後の展望をここで明らかにしたい。

第1節 本研究で得られた3つの知見

(1) 高齢期の人々の役割や活動は地域の特性が反映する

山形県朝日町の典型的な高齢期の人々の役割や活動はどちらかといえば画一的であるという特徴を持っていた。これに対し、東京都世田谷区の典型的な高齢期の人々の役割や活動は多様であるという特徴を持っていた。このような2つ地域の特徴の違いが生じる要因を地域的な特性の違いと結び付けて考えることができた。地域的な特性とはそれぞれの地域の産業構造、地域組織の規範、交通システムの発達状況、人との交流範囲の違いなどである。とりわけ産業構造が高齢期の人々の役割や活動に大きな影響を及ぼしているようだ。よって、役割や活動は地域の特性と深く結びつき、高齢期の人々のアイデンティティの形成に大きな影響を与えているということが考えられた。

(2) 役割には「用意された役割」と「探し出す役割」がある

考察で述べたように、山形県朝日町における役割はすでに用意され、自らが役割を探さなくても自動的に設定されていると捉えることができた。役割が用意されているということは「地域の規範」が朝日町に深く根付いていると考えることができる。農業が生活の基盤となっているような地域では農業を維持していくためには相互扶助の機能を最大限に発揮することが必要なのであろう。その機能を発揮するための役割が常に用意されているのではないだろうか。

これに対して東京都世田谷区における役割は自らが探し、選択していかなければならないというように捉えることができた。終身雇用を基盤とした会社に勤務するサラリーマンが多い都市部では「定年退職」が人生の危機であり、その危機を乗り越えるために新たな役割を自らが探す必要があると思われる。しかし、高度成長期時代をサラリーマンとして生きてきた彼らにとって新たな役割を取得することは容易ではない。なぜならば、彼ら

の生活の中心が「職場」であったからである。「会社人間」であった彼らは家事や子育てのことは全て妻に任せていた。また、自宅へは寝に帰るようなものであり、趣味活動よりも仕事が優先であったに違いない。そして、山形県朝日町のような地域の規範も存在しない。そのような状況で彼らが退職後に新たな役割を一から探し出すことは難しいだろう。人生の区切りがはっきりしていればいるほど、新しい役割を見つけることの苦労は大きいだろう。

このように役割には「用意されている役割」と「探し出す役割」があるということが分かった。「役割喪失期」といわれる高齢期に役割が目の前にあるのと無いのでは、ライフコースに大きな違いを及ぼすに違いない。

(3) 変化する社会的条件

本研究では高齢期の人々の役割や活動は地域の特性と深く結びつき、彼らのアイデンティティの形成に大きな影響を与えているという知見を導きだした。とりわけ「農業」を営む高齢者と高度成長期に終身雇用形態をとった会社組織のなかで「サラリーマン」として働いてきた高齢者では役割や活動の実態が異なっているということが分かった。しかし、現在の日本では農村の生活やサラリーマンの雇用形態に変化が起きているため、今後、高齢期を迎える人々の役割や活動が著しく変化することが予想される。

国勢調査によると、全国の第1次産業の割合は1950年（昭和25年）では48.5%と約半数を占めていたが、2000年（平成12年）には5%と激減している。これに対して第3次産業の割合は1950年（昭和25年）では29.1%であったが、2000年（平成12年）は64.3%と急増した。また、日本の長期的な人口移動は地方から三大都市圏の人口移動が続いている。このような変化は高度成長期による農業労働力の流出があったということが考えられる。農業人口数の減少に対して農林統計協会は次のような懸念を示していた。「農業集落数の減少が続くなか、農家率の高い集落の数が大幅に減少しました。中山間地域で人口が減少している地域ほど水路管理等を実施しない集落が多いことや農家人口が少ない集落ほど年間寄合回数が減少するなど集落活動の停滞が懸念される状況にあります。」（農林統計協会、2003）このように農業人口が減少することは地域における規範の崩壊につながり、農村部の人々の役割や活動に対して大きな変化を及ぼすということを意味するのではないだろうか。

また、近年の会社組織形態にも変化がおきている。高度成長期以降、終身雇用制と年功

序列を念頭に置いた会社組織は専門的能力をもつ人材の需要が高まり実力主義を重んじるようになった。「終身雇用制」の衰退は「定年退職」という人生の危機を迎える機会が少なくなっていくことが予想される。このような会社組織形態と変化も都市部の人々の役割や活動にも影響を及ぼすであろう。

以上のように社会的条件は変化してきている。この変化に応じて高齢期の人々の役割や活動も変化してくということが予想できる。

第2節 本研究の限界と今後の展望

本研究は山形県朝日町と東京都世田谷区の高齢期の人々を対象としたインタビュー結果を基盤にして進めてきた。この2つの地域は農村部と都市部の代表として選択した地域であるが、本研究で明らかになった「高齢期の人々の役割や活動の特徴」が必ずしも農村部と都市部の特徴であると捉えることはできない。また、2つの地域における調査対象者の母数が大幅に異なることから、両者を比較することには限界があった。しかし、役割や活動を把握するという上では2つの地域を対比させ、それぞれの特徴を見出すことができたことは意義があったのではないだろうか。

今後は今回得られた結果が他の地域においても通用するかどうか、検証していく必要があると思われる。都市部の中にも朝日町のように地域規範が強い地域も存在するかもしれない。そういった場所では役割や活動の特徴が変化してくるかもしれない。他の地域において今回のような研究を重ねることができたらよい。また、社会的条件の変化についても常に把握し、その変化が高齢期の人々の役割や活動にどのような変化を与えるのかを考えることも重要である。

あとがき

卒業論文執筆を通して、人間がどのように生活しているのか、どのような役割や活動があるのか、高齢期を生きる人々の姿を知ることができた。また、多くの人との出会いによって様々な考え方に触れることができた。これらのことは卒業論文を執筆しなければ、得ることができなかつたものであり、私にとっては生涯、宝物となるだろう。「看護師」である私にとっても今回の研究は大いに役立つことになるだろう。私は看護師として病に苦しむ多くの人々と接してきた。現場では、病気による身体的苦痛（痛みなど）や精神的苦痛（予後に対する不安など）という側面ばかりに目がいってしまい、その人自身がどのような役割を持ち、どのような活動をしているのかということまで深く知ることはできないでいた。また、祖父母と同居経験が無い私にとって高齢の患者さんの生活をイメージすることは難しかった。しかし、高齢者の役割や活動の実態を把握したことにより、今までイメージできなかった高齢者の生活を自分の中で描くことができるようになった。看護は人間の生活に直接関る仕事であるからこそ、人間がどのように生活しているのか、どのような役割や活動があるのか、高齢期を生きる人々の姿を知ることの重要性をこの卒業論文を通してあらためて感じることでできた。

この卒業論文は多くの人のご協力が無ければ決して完成することはなかった。感謝の気持ちでいっぱいである。

山形県朝日町、東京都世田谷区でインタビューにご協力していただいた皆様、快くインタビューを引き受けてくださいましたことを心からお礼申し上げます。また、インタビューに協力してくださる方をご紹介していただきました、高橋博子先生、S 研究会の皆様、本当にありがとうございました。

野沢慎司先生、卒論執筆に際し、いつもの確な方向に導いてくださいました。

柘植あづみ先生、山形県朝日町での調査実習でたくさんのご指導をしていただいたことで、東京都世田谷区の調査もうまく進めることができました。

野沢ゼミの皆さん、途中からゼミに加入した私を暖かく迎え入れてくれたこと、とても嬉しかったです。

そして、柘植ゼミの皆さん、苦勞して集めた山形県朝日町の情報を快く提供してくれたことに心から感謝します。この情報が無ければ、卒論を執筆することはできませんでした。

最後になりましたが、皆様にあらためてお礼申し上げます。

2005年1月 田久保 純

【注】

1. 一般的に総人口に占める老年人口割合（65歳以上の人口割合）が7%以上で高齢化社会、14%以上で高齢社会といわれている。2000年の国勢調査によると、我が国の老年人口割合は17.3%（平成12年）であり、日本は高齢社会を迎えている。今後も老年人口はさらに増加を続け、2015年（平成27年）には26%、2030年（平成42年）には29.6%というように高齢化は急速に進むと予測されている。
2. 厚生労働省の「簡易生命表」によると、日本人の平均寿命は1947年（昭和22年）では男性50.06歳、女性53.96歳であったが、2002年（平成14年）には男性78.32歳、女性85.23と約30年延びている。つまり、平均寿命の延びに伴って高齢期が大幅に拡大していることがわかる。
3. 「P.G.C. モラール尺度」とは主観的幸福感を測定する尺度である。幸福感をモラールという言葉で表現しており、モラールが高ければ幸福感は高く、低ければ幸福感は低いとみなす。
4. 「S 研究会」とは世田谷市民大学（区民の高い学習意欲に答えるために世田谷区が開設した市民のための大学）の同じゼミで勉強していた人同士が始めた自主ゼミ。2ヶ月に1回定例会を行い、社会的テーマを議論している。参加者の半分以上が80歳代の男女で、毎回5～10人ほどが参加している。
5. 2003年度柘植ゼミ実習生氏名
学部学生：飯田めゆ、石川綾子、金原若菜、城戸崎千里、肥沼良治、斉藤望、中川裕子、南雲和香子、新開拓、花村高浩、水野江里子、水野知佳、田久保純
大学院生：村田太郎、山田美由紀
6. 「世田谷区老人大学」とは世田谷区に在住する高齢者の生涯学習の組織として1977年に世田谷区が設立した。60歳以上の世田谷区民で健康かつ通学可能な人であれば誰でも通うことができる。修業年限は2年でコース別に専任講師を中心とした講義またはゼミナール方式での学習が展開される。世田谷区の高齢者にとって「世田谷区老人大学」は学習の場だけではなく、人との交流の場として重要な役割を担っている。
7. 「人足」(にんそく)とは各集落で決められた共同作業である。作業の内容は水路清掃、草取り、ゴミ拾いなどであり、原則として世帯から一人が参加することになっている。
8. 「世田谷市民大学」とは区民の高い学習意欲に答えるために世田谷区が1981年に開設した市民のための大学。対象は18歳以上の区内在住者または在勤・在学者である。講

座は政治・社会・人間・経済の4コースでゼミナール方式での学習が展開される。公開講座など様々は講座が開講されているため、学習者のニーズに合わせて受講できるしくみになっている。

【参考文献】

1. 会田敬志、「農村高齢者の役割と活動の実態」。(片倉和人・野崎あけみ・会田敬志ほか、『農村高齢者の活動からみた社会的役割』、p21—44、農村生活総合研究センター、1996.)
2. 青柳まちこ、「序章 老いの人類学」。(青柳まちこ編、『老いの人類学』、p1 - 22、世界思想社、2004.)
3. 井上郁、「老人看護に関連する理論と概念」。(山崎智子監修、『老人看護学』、p13 - 24、金芳堂、2004.)
4. 薄井担子、『看護学原論講義』、現代社、1994.
5. 大久保孝治、「社会構造とライフコース ライフコース研究の視点(1)」。(大久保孝治・嶋崎尚子編、『ライフコース論』、p15 - 21、放送大学教育振興会、1995.)
6. 岡崎陽一、山崎喜一監修、『高齢社会の基礎知識』、中央法規出版、1998.
7. 岡村清子・長谷川倫子、『テキストブックエイジングの社会学』、日本評論社、1997.
8. 落合恵美子、『21世紀家族へ(新版)』、有斐閣、2002.
9. 倉沢進・秋元律郎編、『町内会と地域集団』、ミネルヴァ書房、1990.
10. 嵯峨座晴夫、『高齢者のライフスタイル』、早稲田大学出版部、1999.
11. 重松清、『定年ゴジラ』、講談社文庫、2001.
12. 高橋博子、『国勢調査にみる家族変動1970年～2000年 老いで変わる男女の住まい方』、2002。(著者個人発行)
13. 柘植実習、「人とのつながりの中で年を重ねること～社会学からのアプローチ～」。(『2003年度社会調査実習報告書』、p231 - 283、明治学院大学社会学部社会学科、2004.)
14. 野口実、「日本史に見る老人像」—『たくましい老人』の再生のために—。(染谷淑子編、『老いと家族：変貌する高齢者と家族』、p34 - 49、ミルヴァ書房、2000.)
15. D.W. プラース著；井上俊・杉野目康子訳、『日本人の生き方：現代における成熟のドラ

- マ』、岩波書店、1985.
16. C. S. フィッシャー著;松本康・前田尚子訳『都市的体験—都市生活の社会心理学』、p56、未来社、1996.
 17. C. S. フィッシャー著;松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす—北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』、未来社、2002.
 18. 藤崎宏子、『高齢者・家族・社会的ネットワーク』、培風館、1998.
 19. 森岡清志、「高齢者の変容とパーソナルネットワーク」。(森岡清志編、『改定版 都市社会の人間関係』、p88-100、放送大学教育振興会、2004.)
 20. 森岡清志、『変容する高齢者像：大都市高齢者のライフスタイル』、p3-7 日本評論社、1994.
 21. 森岡清志・塩原勉・本間忠敬編、『新社会学辞典』、p1107、有斐閣、1993.
 22. 袖井孝子、「老年期の役割喪失：職業と母親業からの引退」。(『ストレスと人間科学』、2号、p73-76、1987.)
 23. 厚生労働省監修、『厚生労働白書 平成15年版』、ぎょうせい、2003.
 24. 厚生統計協会編集、『国民衛生の動向』、厚生統計協会、2003.
 25. 総務省統計局編集、『東京都の人口』、日本統計協会、2002.
 26. 総務省統計局編集、『山形県の人口』、日本統計協会、2003.
 27. 農林統計協会編集、『図説 食料・農業・農村白書 (平成14年度版)』、農林統計協会、2003.
 28. 総務省統計局、2004. <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/6.htm>